

沢田鍋土遺跡

第II地点

発掘調査報告書

1993年3月

中野市教育委員会



調査区周辺の航空写真

序

当市は現在、関越自動車上越線、オリンピック関連道路等の高速交通事業が進められており、年ごとに大規模な開発行為が実施されております。

この度、発掘調査が実施された沢田鍋土遺跡についても、関越自動車道の通過路線に含まれており、前年度県埋蔵文化財センターが調査を実施大きな成果を上げております。

市が調査を実施した範囲は県と市が行う高速道の側道部分にあたり、県調査分の延長部分にあたります。

今回の調査では、旧石器時代の石器集中部2ヶ所、古墳時代の粘土採掘坑、奈良時代の住居址3ヶ所等の遺構の発見があり、成果を上げることができました。

調査にあたり、真夏の猛暑の中ご苦勞いただきました調査団、並びに御指導、御協力いただきましたいただきました県埋蔵文化財センターの皆様を始め、関係各位に感謝とお礼を申し上げます。

平成4年3月

中野市教育委員会
教育長 嶋田春三

例 言

1. 本書は、長野県中野市立ヶ花字鍋土620-1に所在する沢田鍋土遺跡の第II地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、長野県土地改良課が施行する県営農林漁業用揮発油税財源身代農道整備事業等に関わる工事に伴い、北信地方事務所長と中野市長の委託契約により、北信地方事務所長の委託を受けて中野市教育委員会が実施した。
3. 調査対象面積：約1000m²
4. 調査面積：約1000m²
5. 発掘調査・整理期間：平成4年7月13日—平成5年3月26日
6. 事務局：中野市教育委員会社会教育課
社会教育課課長：小野沢捷 歴史民俗資料館係長：池田 剛
歴史民俗資料館学芸員：徳竹雅之
7. 調査団長：金井汲次
8. 調査員：中島英子 小林伸子 阿藤慎治 鶴田典昭 壇原長則 池田実男
9. 本報告書の執筆：中島英子
10. 本報告書の編集：中島英子
11. 調査の測量にあたって、一部(有)写真測図研究所に委託した。
12. 発掘から報告書作成にいたる過程で、次の方々や期間から御教示・御指導・御協力いただいた。記して謝意を表したい。(敬称略・順不同)
関孝一 土屋積 赤塩仁 林正則 越修一 長野県埋蔵文化財センター 立ヶ花区 草間区 中野市土地改良課 中野市農政課 日本道路公団名古屋建設局中野工事事務所 笹沢浩
13. 発掘調査・整理参加者
浅野喜代子 荒井三郎 荒井由美 飯吉洋志 伊浦みゆき 池田すぎ子 池田幸男 石川高義 石川与喜江 芋川かつ美 小野沢智子 金井正巳 川口せん 小池二美 小林久美子 小林ノブエ 小林ふみ江 小林理兵衛 近藤かつい 酒井幸子 浜澤仲治 浜澤とし子 鈴木貴 春原勝文 高橋ただし 壇原重康 壇原みち江 壇原康信 常田誠 徳武博幸 内藤年男 中島宏 中村一氏 樋口アイコ 樋口政勝 松野義男 増田悦子 松永公太郎 丸山せつ子 山崎のり子 山田陸枝 湯出川こはる 涌田茂輔 和田久美子 和田貞夫

目 次

巻頭写真

序

例 言

目 次

I 遺跡の位置と環境

| | |
|---------------------|---|
| 1 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 2 沢田鍋土遺跡と周辺遺跡 | 1 |
| 3 層 序 | 5 |

II 遺構と遺物

1 遺 構

1) 旧石器時代の遺構

| | |
|---------------|---|
| A 第1集中部 | 6 |
| B 第2集中部 | 6 |

2) 古墳時代の遺構

| | |
|---------------|---|
| A 粘土採掘坑 | 9 |
|---------------|---|

3) 奈良時代の遺構

| | |
|---------------|----|
| A 1号住居址 | 13 |
| B 2号住居址 | 16 |
| C 3号住居址 | 20 |

4) 近世以降の遺構

| | |
|---------------|----|
| A 1号溝 | 20 |
| B 2号溝 | 20 |
| C 3号溝 | 20 |
| D 4号溝 | 22 |
| F 5・6号溝 | 22 |

5) 時期不詳の遺構

| | |
|----------------|----|
| A 1号土壇 | 22 |
| B 3・4号土壇 | 22 |
| C 5号土壇 | 22 |

| | | |
|-----|----------|----|
| D | 6号土壇 | 22 |
| E | 7・8号土壇 | 24 |
| F | 9号土壇 | 24 |
| G | 窯跡 | 24 |
| 2 | 遺物 | |
| 1) | 旧石器時代の遺物 | |
| A | 石器 | 24 |
| 2) | 縄文時代の遺物 | |
| A | 土器 | 34 |
| B | 石器 | 34 |
| 3) | 古墳時代の遺物 | |
| A | 土器 | 42 |
| 4) | 奈良時代の遺物 | |
| A | 土器・土製品 | 43 |
| 5) | 時期不詳の遺構 | |
| A | 石製品 | 49 |
| III | まとめ | 51 |

表目次

| | | | | | |
|-----|------------|----|-----|------------|----|
| 第1表 | 出土石器計測表(1) | 38 | 第2表 | 出土石器計測表(2) | 39 |
| 第3表 | 出土石器計測表(3) | 40 | 第4表 | 出土土器計測表(1) | 48 |
| 第5表 | 出土土器計測表(2) | 49 | | | |

図版目次

| | | |
|------|-----------------------------|----|
| 第1図 | 沢田鍋土遺跡周辺の遺跡 | 2 |
| 第2図 | 発掘位置図(1 沢田鍋土I地点、2 沢田鍋土II地点) | 3 |
| 第3図 | 沢田鍋土II遺跡、グリット配置図、遺構位置図 | 4 |
| 第4図 | 先土器時代、遺物集中地点(1) | 7 |
| 第5図 | 先土器時代、遺物集中地点(2) | 8 |
| 第6図 | 粘土採掘坑 | 10 |
| 第7図 | 粘土採掘抗土層図(1) | 11 |
| 第8図 | 粘土採掘抗土層図(2) | 12 |
| 第9図 | 粘土採掘抗土層図(3) | 13 |
| 第10図 | 粘土採掘抗、東西エレベーション | 14 |

| | | |
|------|------------------------|----|
| 第11図 | 1、1号住 2、1号住遺物出土状態 | 15 |
| 第12図 | 1、2号住 2、2号住遺物出土状態 | 17 |
| 第13図 | 1、3号住 2、窯 | 18 |
| 第14図 | 1、3号住遺物出土状態、 2、窯遺物出土状態 | 19 |
| 第15図 | 1、2号溝 2、4号溝 3、3号溝 | 21 |
| 第16図 | 土 壤 | 23 |
| 第17図 | 石器(1) | 26 |
| 第18図 | 石器(2) | 27 |
| 第19図 | 石器(3) | 28 |
| 第20図 | 石器(4) | 29 |
| 第21図 | 石器(5) | 30 |
| 第22図 | 石器(6) | 32 |
| 第23図 | 石器(7) | 33 |
| 第24図 | 石器(8) | 35 |
| 第25図 | 石器(9) | 36 |
| 第26図 | 石器(10) | 37 |
| 第27図 | 縄文土器拓影 | 41 |
| 第28図 | 粘土採掘坑内出土土器 | 42 |
| 第29図 | 1号住、2号住、3号住出土遺物 | 46 |
| 第30図 | 3号住出土遺物 | 47 |
| 第31図 | 線刻記号拓影 | 50 |
| 第32図 | 石製品、土製品 | 50 |

写真図版目次

| | | |
|-------|---|----|
| 第1図版 | 上、1住 中、2住出土状況 下、2住 | 52 |
| 第2図版 | 上、3住 下、窯断面 | 53 |
| 第3図版 | 上、窯内出土状態 下、SK3、4 | 54 |
| 第4図版 | 上、SK6 下、SD2 | 55 |
| 第5図版 | 上、第1石器集中部 下、第2石器集中部 | 56 |
| 第6図版 | 上、第1石器集中部 (スクレイパー、マイクロブレード) 下、コア、スクレイパー | 57 |
| 第7図版 | 上、粘土採掘坑断面 中、粘土採掘坑断面 下、粘土採掘坑断面 | 58 |
| 第8図版 | 上、粘土採掘坑出土土器 下、7N | 59 |
| 第9図版 | 上、粘土採掘坑出土土器(5N) 下左、7N 上右、3L | 60 |
| 第10図版 | 上、粘土採掘坑南より 下、北より | 61 |

I 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する長野県中野市は、善光寺平の北端部にあたり、市西部を流れる千曲川の中流域の蛇行の激しい右岸に沿う南北に長い市である。

中野市の地形は、北に高社火山群があり、東に箱山・鴨ヶ岳・雲井嶽、南に雁田山の稜線が連なっている所が東部山麓、西は長丘丘陵地帯が南北に走り、これら丘陵の東側には、中野扇状地と延徳低湿地帯が広がっている。また南側には、小布施の扇状地が広がっている。

長丘丘陵周辺は、千曲川によってつくられた河岸段丘が発達している。この段丘面は、第四紀後期に形成された河岸段丘面である。

中野扇状地は、志賀高原に水源を持ち千曲川に合流する夜間瀬川によって形成された扇状地である。延徳低湿地は、この中野扇状地と、小布施扇状地に挟まれた地帯にあって、盆地が両扇状地に埋め残され、低地として残ったものである。

本遺跡の所在する中野市立ヶ花地籍は、長丘丘陵の南端部にあたり、東部山麓に源を発する篠井川が千曲川に流れ込む合流地点がある。

長丘丘陵の最南端部に、千曲川の蛇行氾濫と篠井川の氾濫により長丘の段丘が侵食された二股に分かれところがある。その段丘と段丘の間は谷となっており、低湿地帯である。その谷を境に東を立ヶ花地籍、西を草間地籍という。

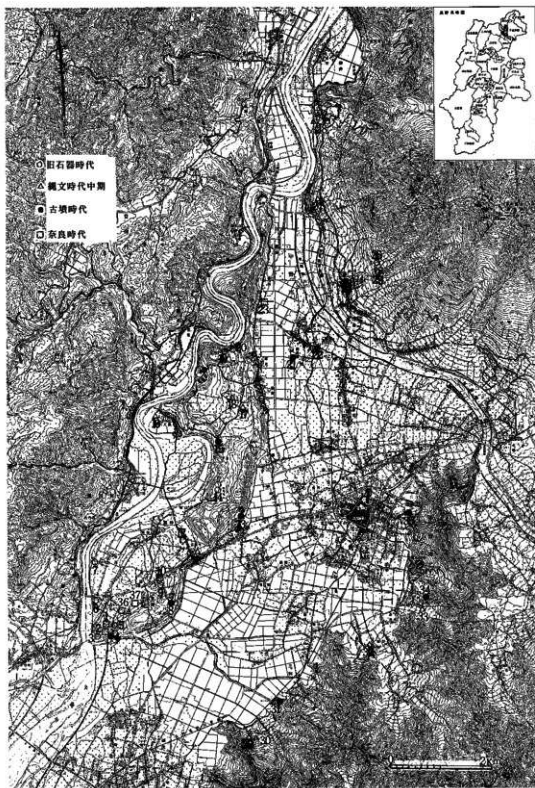
沢田鍋土遺跡は、その東側の段丘上の傾斜部に立地している。この段丘面は草間面である。

2 沢田鍋土遺跡と周辺の遺跡

長丘丘陵は、東側に千曲川を臨み、西側に中野扇状地、延徳低湿地を臨むという多くの湧水地を前面に持っている。このためか、この丘陵上には多くの遺跡が認められている。

旧石器時代では、ナイフ形石器が出土した遺跡として、峯、浜津ヶ池、安源寺、立ヶ花表遺跡がある。陣場遺跡では小形石刃が表採されている。その他に、浜津ヶ池では細石刃様の石器、安源寺では尖頭器が出土している。この尖頭器は縄文時代草創期の可能性がある。縄文時代中期の遺跡としては、陣場遺跡で勝坂式・加曾利E式土器、宮反遺跡で加曾利E式、安源寺遺跡で勝坂式・加曾利E式土器が出土している。古墳時代前半の遺跡としては、安源寺、鳥軒割遺跡で土器が発見されているのみである。奈良時代の遺跡としては、壁田宮下遺跡で住居址が検出されている。窯跡としては、草間古窯址群（茶臼峯）がある。丘陵は上部が粘土質で覆われているので粘土採取には適している。多くの土器がこの粘土でつくられ焼かれている。

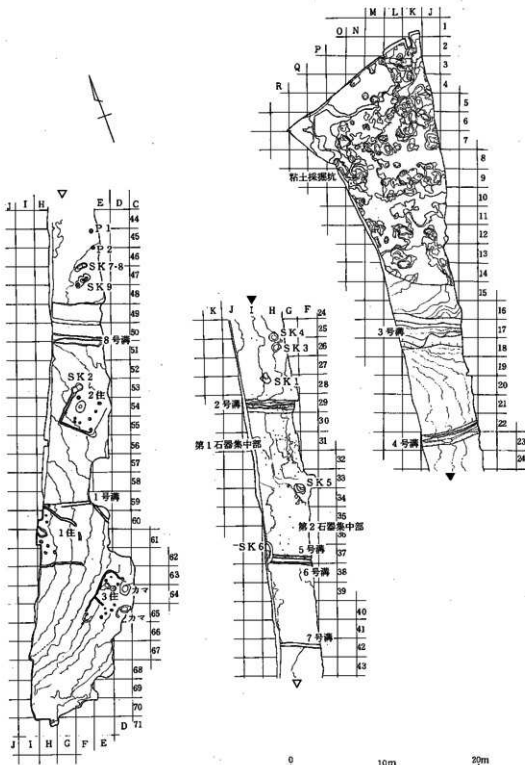
この丘陵上には多くの窯跡がみられる。近代まで、瓦窯が多く存在していた。現代でも「中野窯」と呼ばれる素焼き人形の産地である。



第1図 沢田粘土遺跡周辺の遺跡



第2図 発掘位置図(1 沢田鍋土I地点 2 沢田鍋土II地点)



第3図 沢田鍋土II遺跡 グリット配置図 遺跡位置図

長野県埋蔵文化財センターによって、前年度に沢田田鍋土、がまん湖の調査が行われ(第2図)、この丘陵の高速道関連の遺跡の調査が進みつつある。今後の報告が待たれるところである。

高社山麓には千曲川の右岸に縄文時代中期の遺跡がある。柳沢屋敷跡、柳沢宮の南遺跡である。勝坂式と加曾利E式土器が出土している。古墳時代前半には遺跡がまだ発見されておらず、中半以降の遺跡が発見されている。奈良時代遺跡の発見例がない。

東部山麓地帯には縄文時代中期の遺跡として、桜沢、北越巻遺跡があり、加曾利E式の土器が発見されている。古墳時代前半期の遺跡は発見されておらず、奈良時代の遺跡も発見されていない。

このように中野市の遺跡は、中野扇状地や延徳湿地帯に面した河岸段丘面に多くみられる。長丘丘陵は、その上部は粘土質で覆われているのが特徴である。また東部山麓地域にも粘土質ローム帯がある。それらの粘土を採取し、土器をつくり、豊富な水路を使って製品を運ぶのに適した地域であったと思われる。従って粘土採掘坑のある遺跡や土器を焼いた窯跡が多いと思われる。

3 層 序

- I層 表土層
 - II層 暗褐色土層
 - III1層 灰黄褐色土層……………II層-III2層の漸移層
 - III2層 黄褐色土層……………やや粘性がある
 - IV層 褐色粘土層……………粘質が少ない部分もある。当調査区で、欠失している場所があり、この層が欠失している所はV層が存在する。青粘土の滲み込みがみられる。
 - V層 青褐色粘土層……………IV層がないところではV層が存在する。北側の粘土採掘坑にある。
 - VI層 青粘土層……………北側の粘土採掘坑だけにみられる。
 - VII層 赤褐色粘土層
 - VIII層 赤褐色砂層(砂利混じり)
 - IX層 礫層
- 以上が基本層序である。

II 遺構と遺物

1 遺構

1) 旧石器時代遺構

A 第1集中部(第4図)

当集中部は、28-33・G-Jグリット位置し、2号溝を挟んで石器が集中していた。

集中部の大きさは南北12m。東西4mの広がりが見られ、その西側方向に約3mの広がりがあるということが、前年度の長野県埋蔵文化財センターの調査で確認されている。

地形は、西側に向かって約50cmの傾斜が見られる。特に31-32・H-Gグリットは、西側に方向に落ち込みのように摺鉢状に傾斜が急になっている。その摺り鉢状の落ち込みに多くの石器が出土した。

第1集中部の南側からその北側の2号溝に向かって緩い傾斜が見られる。2号溝にも多くの遺物が出土している。旧石器の遺物が近代の溝の中に流れ込んだものと思われる。

石器の出土する地層は、表土に浮き上がっているものから、Ⅳ(褐色土)層まで出土している。石器は、特に、Ⅲ1層からⅣ層の中部に多くみられた。表土に浮き上がったものは、畑の灌水用のパイプの設置により、攪乱されたものである。

I層 表土(耕作土) …厚さ約30cm

II層 暗褐色土 …厚さ約10cm

III1層 灰黄褐色土 …厚さ約8-10cm、茶色土斑の小粒を含む

III2層 黄褐色土 …厚さ約14-18cm、茶色土斑の大粒を含む

IV層 褐色粘土層 …厚さ約20cm、灰青色粘土層の滲み上がりが見られる

2号溝のものは、覆土上層部から中層部より出土している。溝により石器集中部が攪乱され、溝の中に流れ込んだものと思われる。

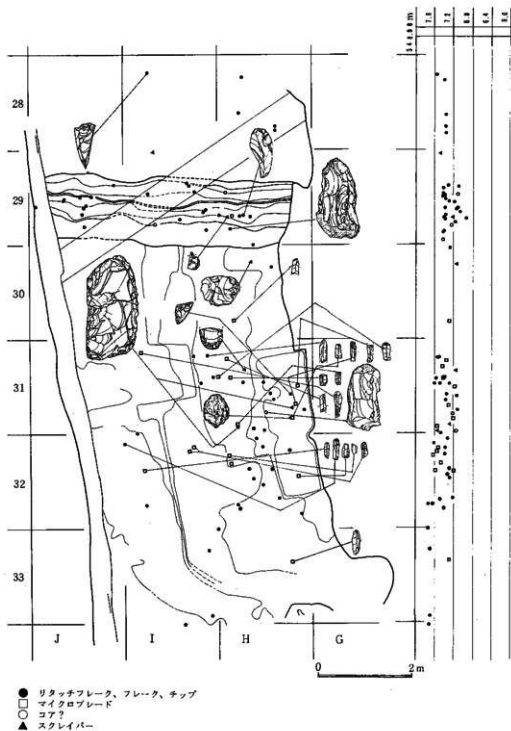
出土石器はマイクロブレード、スクレイパー、コア、打製石斧?磨石等がある。

B 第2集中部(第2図)

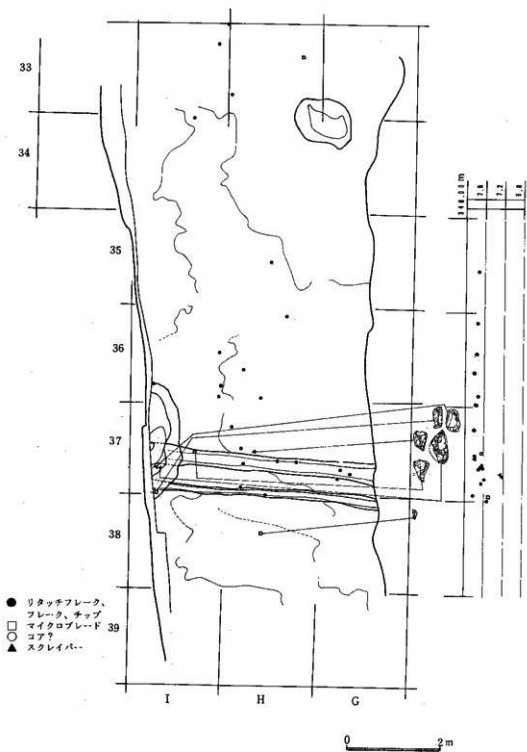
当集中部は、SK6と5号溝と6号溝の覆土中と周辺に集中していた。35-38・G-Iグリットに位置する。

地形は、西側に方向に緩い傾斜が見られる。遺物は、溝とSK6の覆土中のものを除けば、その傾斜の中央部の南北ライン上に散漫に出土した。

石器の出土した地層は、I層よりⅢ1層までの層位であった。SK6と溝内の石器は流れ込みの層であった。土壌と溝によって石器集中部が攪乱されたものと思われる。



第4図 先土器時代 遺物集中地点(1)



第5図 先土器時代 遺物集中地点(2)

2) 古墳時代の遺構

この時代の遺構は、縦横に走る畑の灌水用パイプの設置による攪乱が多く、3号溝を埋めた盛り土がその溝の北側にあり、かなり粘土採掘坑は攪乱された状況にあった。

また粘土採掘坑は地下に横穴を掘り、縦横に粘土を求めて乱掘しているために、表面のプラン確認は非常に難しいものがあつた。

時間的な制約もあつたため、粘土採掘坑のある地点に縦横にトレンチをいれ、その遺構の解明にあつた。

A 粘土採掘坑(第6図)

当調査区の北側にあたるI-15・I-Qグリットに粘土の採掘をしたと思われる遺構があつた。表土層を3号溝の北側から調査区の北端部にかけて青い良質の粘土の層(V-VI層)が広がっている。その粘土を採掘していたものと思われる。その粘土層は、今回調査区以外の西側から西北方向に広がりがあり、前年度に行った長野埋蔵文化財センターの調査でも粘土採掘坑が確認されている。

当調査区の北から北東方向の端部には良質な青い粘土層(V-VI層)がなく、粘土採掘坑の立ち上がり部分となっている。この青い粘土が、粘土を採掘する人々にとって必要であつたと思われる。

粘土採掘坑の掘り方は、まず縦穴あるいは斜め下の穴を掘り粘土の層に達したところで粘土を採取する。ある程度採取した後から、粘土の層を横掘りして、再び粘土を採取している(第9図15)。そして、その横掘り手が届くところまで掘り進んでいる。その横掘りは、一ヶ所ではなく、数カ所に掘り進んでいると見られる。

またもう一つの掘り方として、かなり大きな縦穴や斜め下に穴を掘り込み、その穴を横に広げながら断面にでる粘土層を横に掘っていく方法が取られているようである(第7図3の中央部分)。

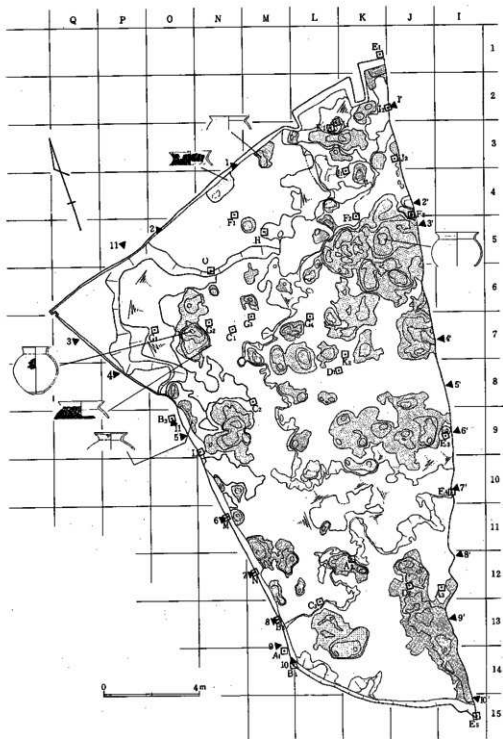
粘土採掘坑を横に掘り進むには、いらなくなった土砂を捨てる行為をしなくてはならないが、粘土を取り終わった横穴にそれらの土を捨て、埋め戻しているように思われる。横穴の層序を見ると、流れ込んだ土以外にもブロック状になった土も見られる。流れ込んだ土にしては層序が一定ではない。粘土採掘に都合の良い状況で作業が行われていたものと推定される。

また、粘土採掘が終わった後、空洞の状態のところ花落したと思われるところもみられる(第9図11・13・14)。

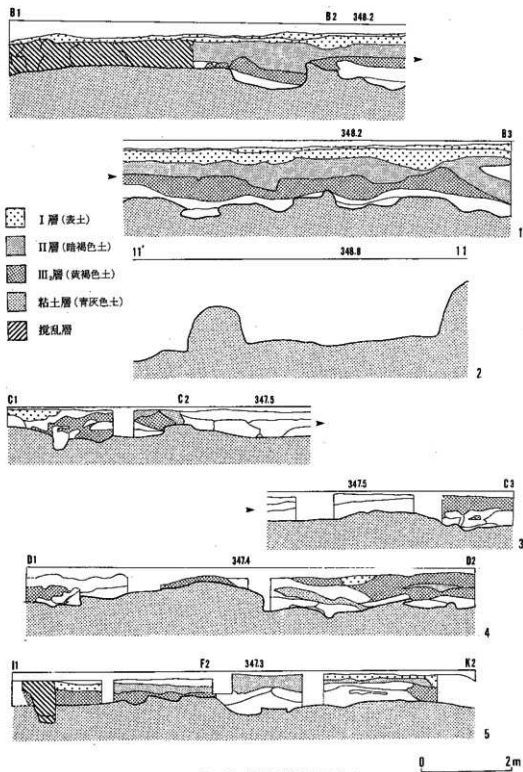
粘土採掘坑の底面は良質な粘土が取れるところは多く取るためか、掘り鉢状の大小の穴がみられ、断面も平坦でなく凹凸の激しい穴のあいた状態であつた(第10図)。

当遺跡での粘土採掘は、かなり広範囲で行われており、その採取された粘土量はかなりの量と思われる。

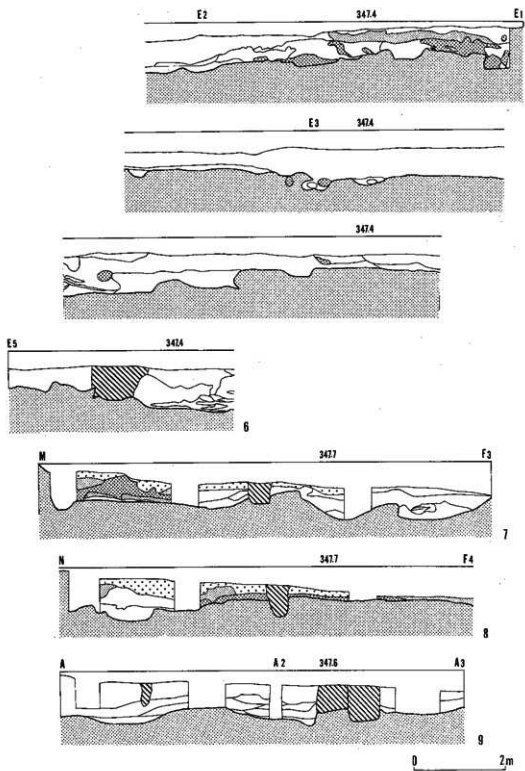
覆土中には、縄文時代の石器や、土器片、古墳時代の土器片が発見された。また、粘土採掘



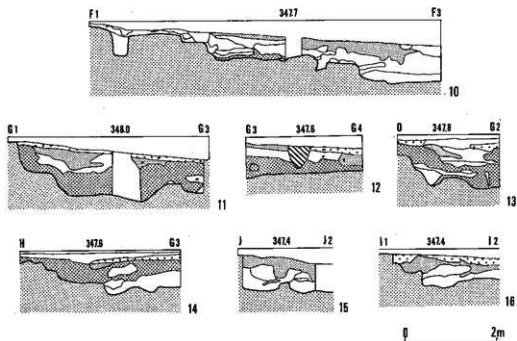
第 6 圖 粘土採掘抗



第7圖 粘土採掘抗土層圖(1)



第 8 图 粘土採掘抗土層圖(2)



第9図 粘土採掘抗土層図(3)

抗の底部に、古墳時代の甕が数点あり、あるものはその中に青粘土が入った状態で発見された。縄文時代そこに住居やその他の遺構があったと思われる、古墳時代の人々がその遺構を壊しながら、粘土を採掘していたものと考察される。古墳時代以降の遺物は表層には検出されているが、粘土採掘抗の中程より下部には検出されなかった。当調査区の粘土採掘抗は、古墳時代のものと考察される。

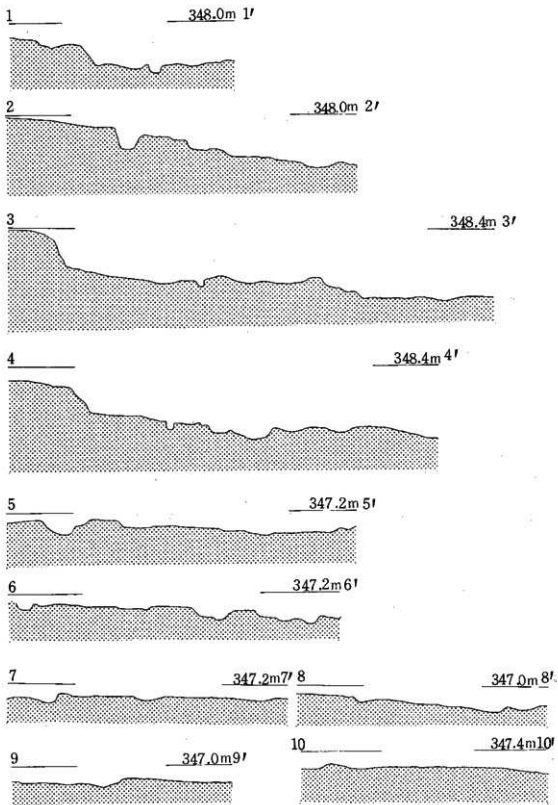
このように、粘土採掘抗の発掘は、横穴が掘られたりしているためにプランがはっきりと上層面では確認ができない。またたいへん多くの量の土が掘られるために時間と労力が必要である。この遺跡のように広範囲にわたる粘土採掘抗の発掘では、時間的な制約などを考慮すると、断面による確認でしか方法がないと考え、トレンチを入れることで掘り方などの確認をした。

3) 奈良時代の遺構

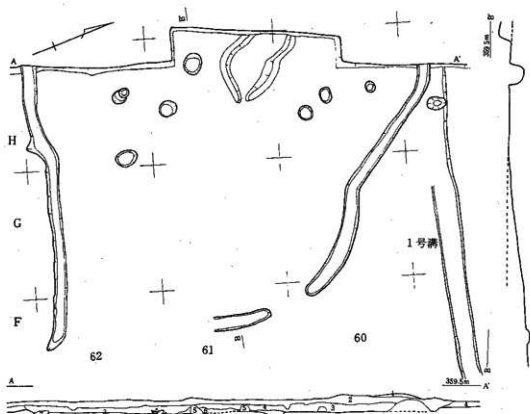
A 1号住居址 (第11図)

1号住居址は59-62・F-Hグリットに位置している。住居は段丘の緩い傾斜部分にあり、地滑りにより、覆土や遺物がほとんど流れ落ちてしまっている。東側、竈周辺は、竈確認のため拡張調査した。住居の東中央に竈が設けられている。

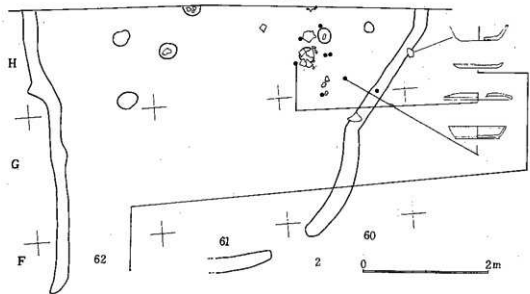
住居の軸はやや北東方向に向いている。住居址のプランは北東軸約4.0m、南西軸は西側が地滑りで破壊されおり不明である。方形の住居であったと推定される。



第10圖 粘土採掘抗東西エレベーション



- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 1層(黄土層) | 5. 赤黄褐色土(袖) |
| 2. II層(暗褐色土) | 6. 瓮土(カマド) |
| 3. 暗茶褐色土 | 7. 暗黄褐色土(周溝) |
| 4. 灰赤褐色土 | |



第11图 1.1号住 2.1号住遺物出土状態

はっきりした周溝は不明である。南側と北側に住居の周溝と思われる溝が断面で確認されたが、南東側におおきな木の根等に攪乱されていたり、住居の西側が地滑りで破壊されていたり、はっきりしなかった。住居の北側に東西に走る時期不明の溝があり、周溝部分が破壊されている。また住居の西側には住居のものとは違う周溝が段丘の傾斜に沿って走っており、別の施設の溝と思われる周溝が検出された。

柱穴は、約20cmぐらいの深さで径30cmの柱穴が、住居内にみられた。柱穴内に窯体や、支柱が覆土中から発見された。この2ヶ所の柱穴が住居の主柱であったと思われる。

住居内の覆土は、約40cmの暗茶褐色土である。竈の袖は赤黄褐色の粘土を固めたものである。竈は、住居の主軸の中央の北東側にあり、調査区外なので確認はできなかったが、住居の壁に付いた状態であったと思われる。

遺物はほとんど北東側の柱穴付近で出土した。須恵器の高台付き杯、蓋、杯や甕の破片などまとまって出土した。

B 2号住居址(第12図)

2号住居址は遺跡の南西側の54-56・F-Gグリットに位置している。西から北西方向に傾斜しており、住居の斜め半分が地滑りにより、破壊されている。

住居址のプランは、北西軸が現存約3.5m、北東軸が3.9mであり、北西方向長軸とする方形の、周溝を有する住居址と思われる。住居北東方向の周溝上に土壌があったが、遺物もなく、表土層のみで占められており、近現代の土壌と思われる。

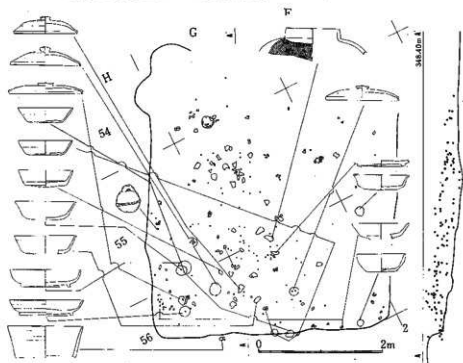
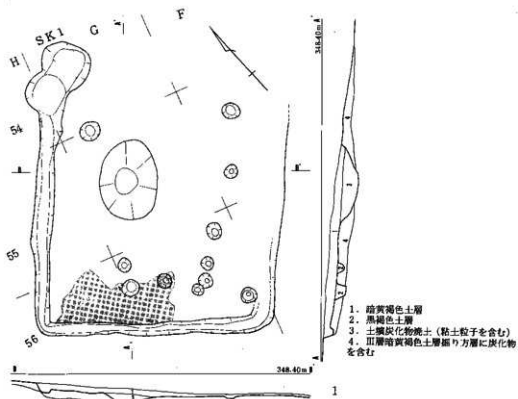
住居址の覆土は西側から北西側が地滑りでなく、南側から東側にかけて暗黄褐色の覆土が10cm残っていた。その残った覆土や床面からは、酸化炎で焼かれた杯、高台付き杯、高台付き盤、摘み付き蓋、須恵器甕の破片等が出土した。

南東側壁の部分に灰青色粘土がこぼれた様な状態で床面を覆っていた。その粘土上に第29図14の高台付き杯が伏せた状態で出土し、その粘土下の床面に、摘み部が裏がえった状態で第29図20の蓋がほぼ完形品の状態で、第29図17の蓋が一部欠損した状態で出土した。この粘土下に第29図20が完形品で出土し、粘土範囲付近で、第29図18の蓋の欠損品が出土し、第29図13の杯が一部床面から出土した。

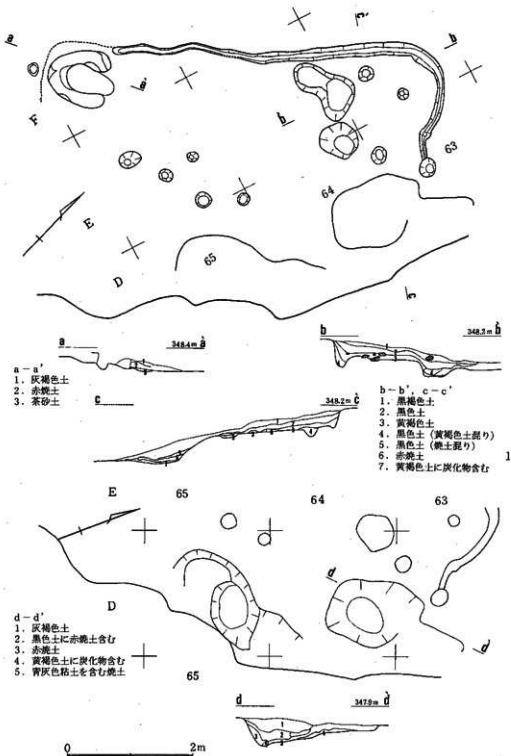
住居址の中央には摺り鉢状の土壌が床面下にあった。土壌は、住居址の軸と同様な、北西方向が長軸になり1.3m、短軸0.9mであった。土壌の覆土は焼土と炭化物が多く含まれており、この覆土中には土器片が含まれている。須恵器と土師器の破片であった。その須恵器と土師器には2次焼成した形跡はなかった。住居の埋設前に掘られた土壌であろう。

住居址の柱穴は、住居の西側に長軸に沿って確認でき、南壁に沿っても確認できたが、ひがし壁に沿っては1ヶ所しか確認できなかった。深さ10-15cmで、余り深く掘り込んではいないようである。

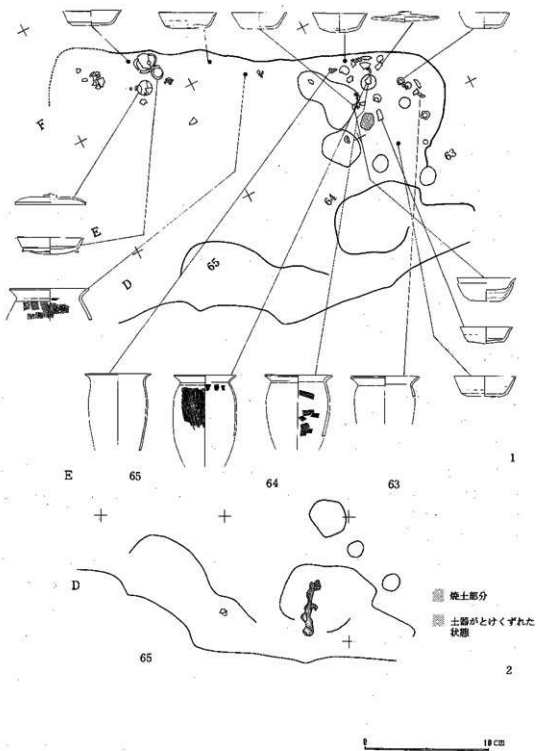
竈は確認できなかった。北西側が地滑りしているために確認できなかったものと思われる。



第12図 1.2号住 2.2号住遺物出土状態



第13図 1.3号住 2.カマ



第14図 1.3号住遺物出土状態 2.カマ遺物出土状態

C 3号住居址(第13図1、第14図1)

3号住居址は、当調査区の南西側の63-66・D-Fグリットに位置し、かなりの急斜面に位置している。住居の構築当時は、斜面を背にした座取り形の住居であったと思われるが、住居の中央部の壁部分に大きな木株があり攪乱されており、傾斜面の地滑りと、西側に構築された窯跡によって、破壊されている。長軸は約6.5mで、短軸は2mしか現存していない。

周溝は方形に壁面に沿っていたものと推定される。

竈は西側のコーナー壁の所にあった。煙道部が僅かにのっこっている。竈に関係すると思われる土師器が存在したが、竈の上面が地滑りで破壊されているため、胴部破片のみで、器形の手がかりになる破片がなかった。

竈のやや北側の壁付近で、須恵器の高台付杯と摘付蓋と杯と須恵器の甕の口縁部があった。

住居の北側壁の付近には、遺物が集中してみられ、須恵器の杯や、2重に付いたまま焼けてしまっている須恵器の杯や、焼け歪のある摘付蓋や、土師器の甕が散乱していた。

その遺物の集中しているやや南側に不定形な土壌が2基あり、その中に須恵器の甕や杯、土師器の甕の小破片が出土した。この土壌は柱穴の可能性もある。

柱穴は、住居が地滑りのため北西側しかプランが残っていないためにはっきりとしたものは検出できなかった。

4) 近世以降の遺構

A 1号溝

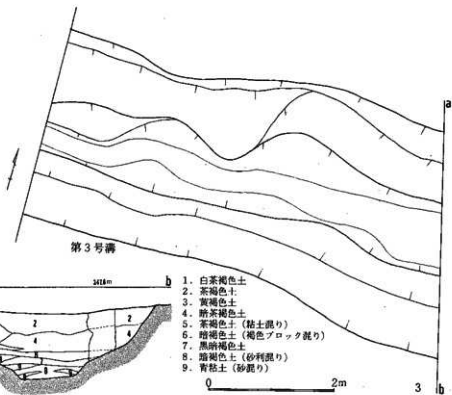
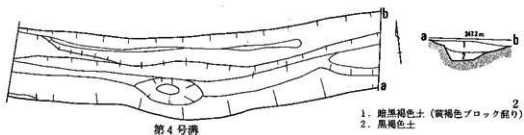
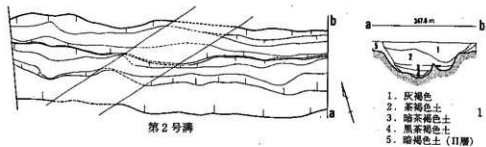
1号溝は当調査区の南50-51・E-Hグリットに位置する。現代の地下ケーブル用の溝によって溝の北側部分は破壊されている。そのため、形状や深さ、性格などは不明である。溝は東より西へ傾斜に沿って走っていたと思われる。ケーブル用の溝の覆土に有茎石楾が出土している。その他溝から須恵器や土師器の破片、陶磁器の破片などが出土している。

B 2号溝(第15図1)

2号溝は調査区の中央部にあり、29・G-Iグリットに位置する。旧石器時代の第1集中部の北側部分にあたる。溝は東より西へ傾斜に従って走っている。一部畑の灌水用のパイプ溝によって破壊されている。幅約1.2-1.4m、深さ約0.5mで、底面は凹凸が激しく川底のようである。流路は2本みられ、北側に走る溝の方が浅いが、ほぼ同時期に流れが埋没したようである。溝の中の遺物は、旧石器時代の石器や縄文時代の石器、土師器の破片や須恵器の破片、染め付けの茶碗の破片などが覆土中に検出されたが、溝下部から礫の塊以外は遺物が発見されなかった。

C 3号溝(第15図3)

3号溝は調査区の北側にあたる粘土採掘坑の南端にあたる16-18・I-Lグリットに位置する。溝は東より西へ傾斜に沿って走っている。幅約3.2-3.5m、深さ約1.0mである。溝の南端に溝に沿って現代の排水管が埋設され、溝を一部破壊している。溝は三度ほど埋没しながら水が流



第15図 1.2号溝 2.4号溝 3.3号溝

れていたようである。溝底部は灰青色粘土層を侵食している。覆土下半部には、須恵器の破片が出土した。覆土中程からは陶磁器の破片が出土している。

D 4号溝(第15図2)

4号溝は2号溝と3号溝の間であり、22-23・F-Jグリットに位置する。東から西へ傾斜に沿って走っている。幅約1.2m、深さ約0.2mで、2本の流路がみられる。北側は浅く南側のものよりも新しいと思われる。西側の覆土より、陶磁器片が出土している。畑の用水路ではないかと思われる。

E 5・6号溝(第5図)

5・6号溝は6号土壌の上面を破壊している。旧石器時代の第2集中部にあたる。37-38・G-Iグリットに位置する。東から西へ傾斜に沿って走っている。5号溝と6号溝は平行して走っている。5号溝は北側にあたり、幅0.3m、深さ0.15mである。6号溝は幅0.2m、深さ0.1mである。これらの溝からは、旧石器時代の石器や、縄文時代の石鏃が出土している。6号土壌の覆土の遺物が混入したものと思われる。これらの溝は畑の境界の溝ではないかと思われる。

当調査地の溝は、溝底部からの遺物の発見はなかった。覆土中には陶磁器の破片や染め付けの破片等近世以降の遺物が含まれていた。溝の出現期ははっきりしないものの、埋没期は近世以降と思われる。

5) 時期不詳の遺構

A 1号土壌(SK1)(第16図1)

1号土壌は旧石器時代第1集中部北側にあたり、27・28・I-Hグリットに位置する。土壌の形状は不定形で、長径1.15m、短径0.7m、深さ約0.3mである。北東部にやや低い部分がある。土壌の性格は不明である。覆土最上部に頁岩性の旧石器時代のフレイクが出土している。他に遺物は出土していない。

B 3・4号土壌(SK3・4)(第16図2,3)

3・4号土壌は、25-26・Hグリットに位置する。3号土壌は形状が不定形で、長径1.0m、短径1.0m、深さ0.08mの浅い、性格不明の土壌である。遺物は土師器の小破片が覆土に混入していた。4号土壌は楕円形の土壌で、長径1.05m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。覆土には土師器の小破片が出土しているが遺構の性格は不明である。この土壌の周縁に石鏃が出土している。

C 5号土壌(SK5)(第16図7)

5号土壌は、33-34・G・Hグリットに位置している。不定形の形状で、長径1.2m、短径0.9m、深さ約0.6mであった。底面はオオーバーハングしている。遺物は頁岩のフレイクが覆土中から出土している。土壌の性格は、赤褐色の粘土を採取するための穴であったと推察する。

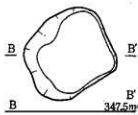
D 6号土壌(SK6)(第16図6)

6号土壌は、旧石器時代第2集中部の東側にあたり、36-38・Iグリットに位置しており、調

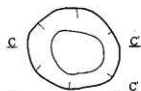


1号土壌

1. 暗褐色土層
2. 黒色土層 (茶色土斑多い)
3. 黒色土層 (茶色土斑少ない)
4. 暗灰色土層 (2の層混入)
5. 灰黄褐色土層 (II層)
6. 黄褐色土
7. 黄褐色ブロック

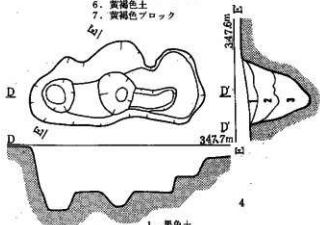


3号土壌



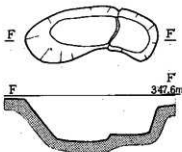
4号土壌

1. 灰黄褐色土
2. 黒色土
3. 暗黒褐色土
4. 暗黒褐色土 (茶色土斑混入)
5. 黄褐色土



9号土壌

1. 黒色土
2. 黒褐色土 (粘性なし)
3. 黒褐色土 (粘性あり)

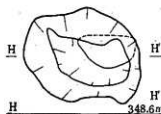


7・8号土壌



6号土壌

1. I層
2. II層
3. 黒茶色土
4. 黒茶色土 (茶色土斑多い)
5. 黒茶色土 (茶色土斑大粒)
6. 灰褐色土
7. 黒色土 (茶色土斑少)
8. 黒色土 (茶色土斑中)
9. 黒色土 (茶色土斑多)
10. 黄褐色ブロック (6・7・8土層混入)



5号土壌

1. 黒茶色土
2. 灰黄褐色土
3. 灰青色粘土
4. 暗茶褐色土
5. 暗茶褐色土 (茶色土斑混入)
6. 黄褐色土
7. 灰青色粘土

第16図 1.1号土壌 2.3号土壌 3.4号土壌 4.7.8号土壌 5.9号土壌

6. 6号土壌 7. 5号土壌

査区外の東側に遺構が拡大する様相を呈している。覆土上面の一部は、5・6号溝によって破壊されている。形状は、遺構の西側一部しか調査できず不明である。調査範囲の遺構の大きさは、長径2.5m、短径0.5m、深さ1.15mである。覆土や土壌の形状から推察すると、粘土の採掘坑ではないかと思われる。覆土中の遺物は、旧石器時代の石器、縄文時代の石器が覆土中に混在していた。縄文時代の遺構と旧石器時代の石器集中部を破壊して掘られた土壌と思われる。調査区外の東側には、縄文時代と旧石器時代の遺構の存在があらうと思われる。

E 7・8号土壌(SK7・8)(第16図5)

7・8号土壌は46-47・F-Gグリットに位置し、7号土壌は8号土壌に切られる状態で出土した。7号土壌の覆土は黒褐色土で、8号土壌の覆土は黒色土であった。7号土壌も8号土壌も不定形をしている。現状の7号土壌の大きさは長径0.9m、短径0.5m、深さ0.45mである。8号土壌は長径0.5m、短径0.45m、深さ0.35mである。遺物は出土していない。両土壌の性格は不明である。

F 9号土壌(SK9)(第16図4)

9号土壌は、47-48・F-Gグリットに位置する。土壌の形状は、不定形で、長径1.85m、短径0.85m。深さは0.5m-0.65mを測る。遺物は出土しなかった。この土壌の性格は不明である。土壌の下面は赤褐色の粘土層にあたり、粘土を採掘した穴の可能性もある。

G 窯跡(第13図2、第14図2)

窯は調査区の南西斜面の先端部にあたる63-65・C-Dグリットに位置している。南西斜面は崖のような状態であり、地滑りを起こしており、調査範囲外でもあった。しかし、3号住居址の検出の為拡張している際発見された。当窯は窯の上部にあたると思われる。そのほとんどは流出している。窯は並んで2基あったものと思われる。遺物はほとんど見られず、北西側の窯に遺物として土器が溶け崩れた塊があったのみで、焼土と炭化物のみが検出された。時期も窯の形態も不明である。

2 遺物

1) 旧石器時代の遺物

A 石器(第17図一第20図1-3、第21-22図、第25図23)(第1表、第2表)

マイクロブレード(第17図1-21)

当遺跡では、マイクロブレードが21点出土した。

完形と思われるものは2と3であった。2はやや細身で主要剥離面が弓なりに反っている。正面も裏面と同じ方向の剥離であり、2条の稜を持つ。3は2よりやや幅広である。2ほど主要剥離面の反りは顕著ではない。この2・3がこの遺跡のマイクロブレードの大きさを示していると思われる。長さは2.7-2.8cm、幅は0.8-0.9cm、厚みが0.2cmが標準と思われる。

他のマイクロブレードは、打点の折れているものや先端の折れているものであった。幅はやや幅広いものと細身のものがあるようであるが、それほど顕著な違いはないようである。第1集中部のものは、形態的に整っているようであるが、第2集中部のものは小さく折れているものもあり、表面の稜線も平行に整って入っていない。

石材は、すべて黒曜石で、透明なもの、半透明なもの、縞のあるものなどがあるが、大変良質な黒曜石の原石が利用されているようである。

地点別出土量は、第1集中部は17点、第2集中部は4点であった。

出土層位は、II層から出土したものは第17図13・18・20・21、III層から出土したものは第17図4・7、III 2層から出土したものは第17図2・8・14、IV層から出土したものは第17図3・11・16・19であった。第17図9・10・15・17はSK6の覆土から出土したものである。

ナイフ形石器 (第17図22・23)

22は第2集中部のSK6の覆土上面から出土したものである。発掘の際欠損してしまい、全体の剝離状況ははっきりしないが、残存部より推測するならば、両面整った整形剝離の加えられたナイフ形石器、あるいは、ポイントの可能性もある。表裏より先端部に調整剝離が加えられ尖らせ、基部も表裏より剝離が加えられ、やや円みをもたせている。形態は半月形、切り出し形の可能性もある。石材は、赤色の良質な頁岩を用いている。旧石器時代末期から縄文時代創草期にかけての石器の可能性があらと思われる。

23は集中部以外の46Fグリットで、II層の下面より単独で出土した。黒曜石製である。側縁部がやや欠損している。主要剝離面側の打点部を正面からの薄い剝離で取り除き、正面の基部にも剝離を加え基部の形を整え、基部に左右同じ様な抉りをつけている。先端部はやや欠損しているが、剝片の終局部をそのまま残したと思われる、鋭利になっている。ペン形ナイフに近似した形態である。石材は良質な黒曜石である。

削器 (第17図24)

第2集中部のSK6の覆土より出土した。不定形な縦長の剝片の鋭利な側縁部側に、整った薄い小さな剝離を正面より裏面に向けて剝離し、刃部を作出している。石材は黒曜石製である。

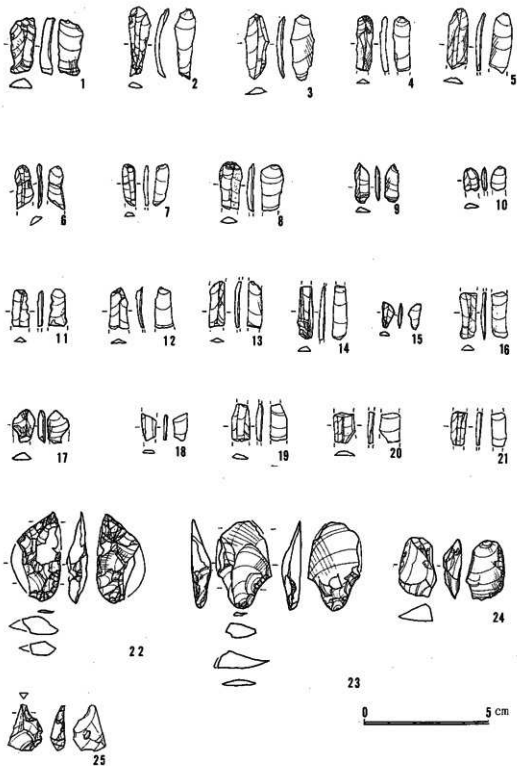
ドリル? (第17図25)

第1集中部の2号溝の覆土より出土した。不定形な剝片の側縁に裏面より剝離を施し、やや尖った先端部を作出している。先端部はやや摩耗しているのでドリルとしての機能をもたせた剝片の可能性もある。先端部の断面は三角形である。石材は黒曜石である。

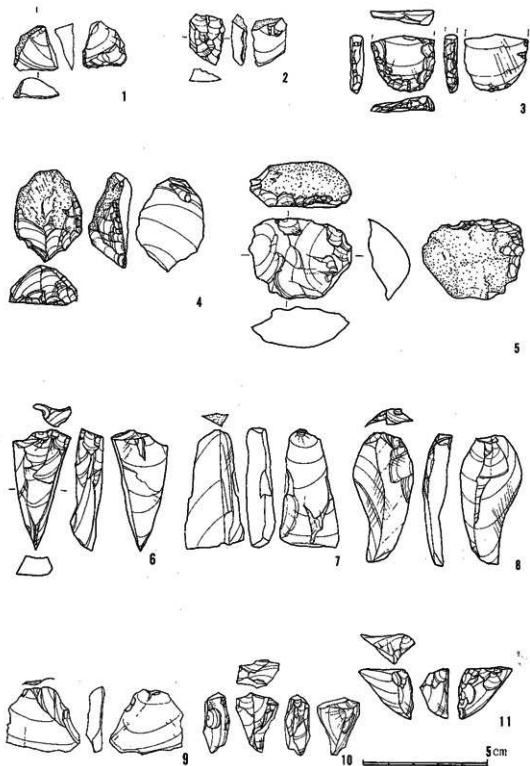
スクレイパー (第18図3-5、第19図1、第22図1-3・7)

第18図3-5、第19図1は第1集中部より出土している。

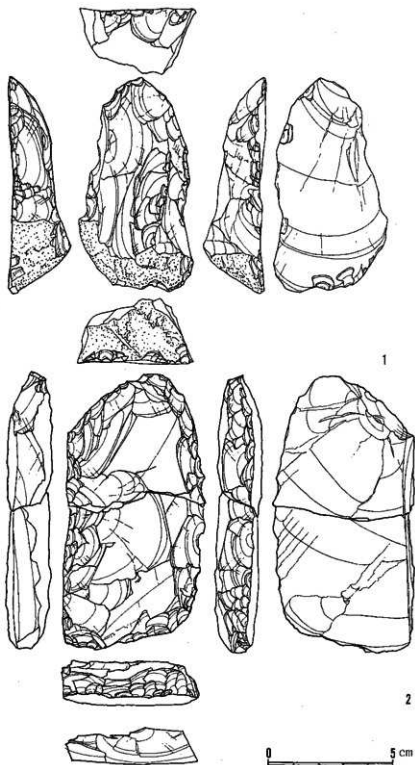
第19図1は、2号溝の上面より出土した。コアの打面調整の剝片と思われる分厚い縦長の大きめの剝片を用いている。正面の剝片終局部は、転石面大きくを残している。剝片の両側縁を、裏面より正面に向けて直角に近い角度に剝離している。打点部も裏面より正面に向けて、約45



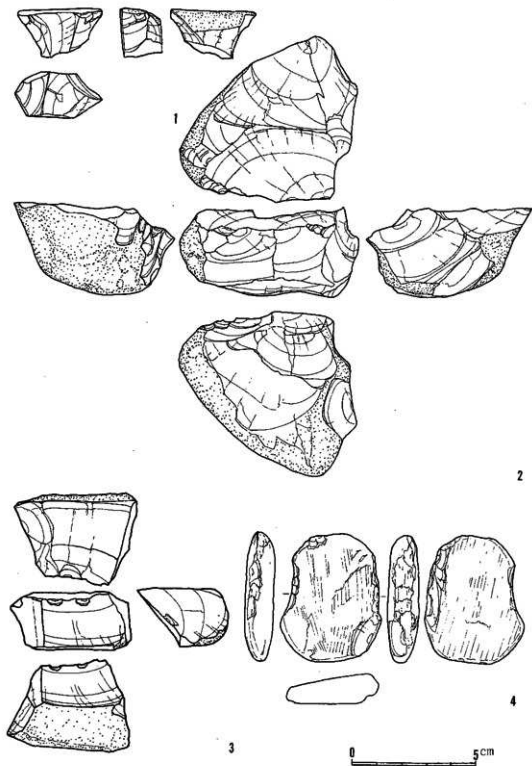
第17圖 石器(1) S=2/3



第18圖 石器(2) S=2/3



第19圖 石器(3) S=2/3



第20圖 石器(4) S=2/3

度の角度の刃部と思われる縁片の円みを作出している。剝片の終局部の主要剝離面側にも小剝離がみられ、この面も50度の鈍角な刃部として利用された可能性がある。石材は、良質な頁岩製である。

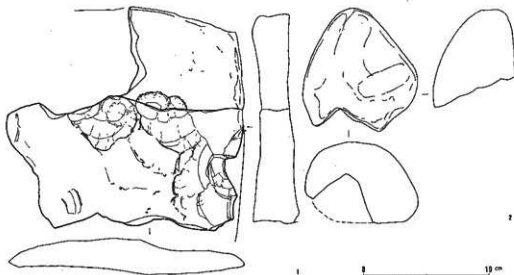
第18図3はⅣ層下面から出土している。基部の部分が欠損しており、刃部のみが残存している。縦長の形態の整った剝片を用いている。刃部はその剝片の終局部から両側縁部にみられ円みのあるいわゆるエンドスクレイパーである。剝離は主要剝離面側より正面に向けて、整然と施されている。石材は黒曜石である。

第18図4はⅢ2層より出土している。打面を設けるときに球形母岩から最初に剝した剝片で、正面に多くの転石面を残した厚みのある剝片を用いている。打点部に主要剝離面側から正面に向かって、45度の角度で細長い剝離を数回加えている。エンドスクレイパーのような形態であるが、刃部は円みがなくやや尖っているような刃部である。石材は黒曜石製。

第18図5はⅣ層下部より出土した。円礫の丸い表面を剝したその剝片を利用している。剝片の終局部の縁辺に転石面側から主要剝離面側へ剝離し、その後を転石面側から主要剝離面側に向かい細かい剝離を加え、その剝離が剝片側縁部まで及んでいる。この面を刃部としたものと思われる。

第22図1・2は、粘土採掘坑の覆土の攪乱された中から出土したものである。1も2も両面剝離されており、母指状スクレイパーと思われる。石材は、1は珪質頁岩製2はチャート製である。石材や形態なども1、2は近似している。

第22図3は43Gグリット単独出土である。層位はⅢ1層上部である。小さめの不定形な剝片の打面部に表裏から剝離を施して刃部を作出した、基部を欠損した石器である。石材はチャート製。



第21図 石器(5) S=1/3

第22図7は3号溝の側面のV層の表面から出土した。溝に流れ込んだ石器が粘土層に張り付いた可能性もある。剥片の側面に転石面を残す厚みのある板状の剥片を用いている。石器の両側縁に挟りを加えたノッチドスクレイパーのようである。石材はチャート製である。

コア (第18図10、第20図1-3)

第18図10は、5号溝覆土からの出土である。マイクロコアの一部のフレークである。コアからはマイクロブレードを剥離する際に壊れ細片となってしまったものと思われる。石材は黒曜石製。

第20図1-3は第1集中部より出土したものである。1と3は第2溝の覆土中より出土し、2はⅢ2層下部より出土した。

2は幅広の寸詰まりの剥片が剥離されたコアである。円盤を半載し打面が平らになるように整形剥離し、その裏面にも薄い剥離を加え扁平な形態にし、平になった打面より剥片を剥離したコアである。石材は珪質頁岩である。表面風化している。

リタッチフレーク (第18図1・2)

1と2は、不定形な小さな剥片の側縁に小剥離がみられる。1は2号溝覆土より出土し、2はⅢ1層上面から出土している。石材は1がチャート、2が黒曜石。

打製石斧 (第19図2)

2の石器は、第1集中部のⅣ層上面より、基部と刃部に半分に分れた状態で出土した。折れの状態は、正面の中央部に力がかかった状態で折れたものと思われる。大形の板状に割られた剥片を利用している。正面左側の側縁は、ほぼ垂直な面となっている。その面より正面に側縁部の剥離を行い、直線的な側縁にしている。刃部は剥片の終局部にあたり、刃部から始まった整形剥離が右側縁部から基部にあたる打面部まで及び、左側縁部の上部まで達している。全体的な形態は長方形である。刃部はやや右上がりである。石材は安山岩である。

磨石 (第21図2)

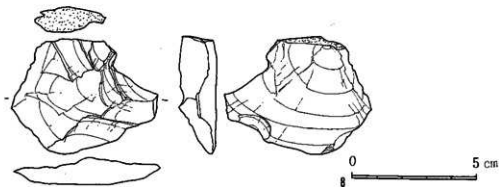
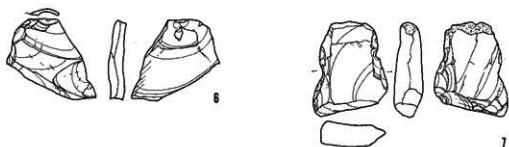
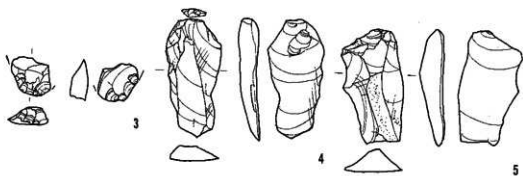
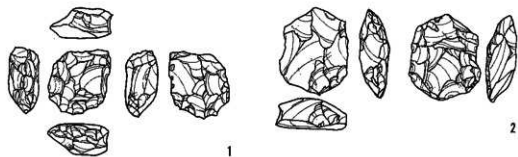
2は第1集中部から出土した。地層は、Ⅳ層から出土した。不定形な厚みのある多孔質な安山岩を用いている。約1/2欠損している。磨面は正面の凸面になっている部分で使用されていた。

台石 (第21図1)

1は単独で26Iグリットから出土している。Ⅰ1層下部から出土した。厚い板状の方形の転石を利用している。約1/3欠損している。石器の中央部に上から叩いたような打痕があり、その面が石器を加工するとき台石として使われていたのではないと思われる。石材は安山岩である。

フレーク (第18図6-11、第22図4-6)

第18図6-8は第1集中部より出土している。6はSK1の覆土上面より出土し、7はⅣ層より出土し、8は2号溝覆土中から出土している。



第22図 石器(6) S = 2/3

8はブレードのようにであり、この3点は縦長の剥片である。

6の石材は頁岩で、第19図1の石材と同一母岩である。7は砂岩、8は黒曜石製である。

第18図10はコアの項目でふれた。

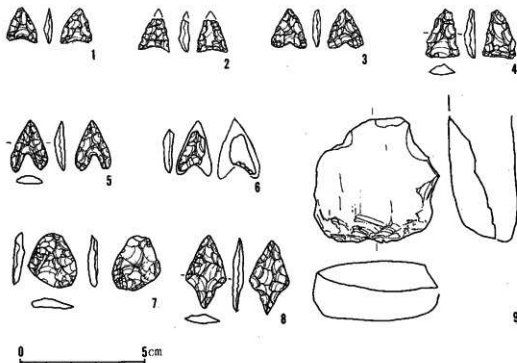
第22図4・5は粘土採掘坑の覆土からの出土である。縦長の形の整った剥片である。4の石材は黒曜石、5は安山岩である。

第1集中部からフレーク、チップ類は上記以外は47点出土し、第2集中部からは17点出土した。

以上のように、中野市でまとまったマイクロブレードの出土する遺構が見つかり、旧石器時代の終末期の解明の一端が覗かれ、マイクロブレード期の石器群も確認できた。また、落ち込みの状態に石器が集中している様子が窺われ、その西側を掘られた長野県埋蔵文化財センターの報告を待って、落ち込みの解明を行いたいと思う。

2) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、ほとんどが調査区の北側にあたる粘土採掘坑の覆土中に攪乱された状態で出土した。粘土採掘坑では、土器がすべて脆く溶けてしまいう状況下にあった。従って、文様



第23図 石器(7) S=2/3

を読み取れるだけの遺物がほとんどなかった。この地点の石器類もかなり摩耗していた。この粘土採掘坑は、縄文時代の住居址や遺構を破壊して粘土を掘っていたものと思われる。あるいは縄文時代にも粘土をここで取っていた可能性もある。しかし、粘土採掘坑の覆土中の攪乱されたそうには土器片が出土していたが、下部層からの縄文土器片の出土はみられなかった。

縄文時代のものと思われる石器は、粘土採掘坑以外からも遺構の覆土中に、旧石器時代の石器と混在していた。

A 土器 (第27図)

上記のように、土器は粘土採掘坑の覆土中からのみ約40破片出土し、第27図の土器片以外は、文様や器形が読みとることが不可能であった。

第27図1-4は口縁部の破片である。1・3・4は突帯文を口縁下に巡らせている。

2は口縁下に沈線文を施している。その口縁部の下は、単節?縄文を施文している。

5は胴部破片で、U字状の沈線文が縄文の地文の上に施文されている。これらの破片は、縄文中期後半の深鉢土器の破片と思われる。

12は深鉢の口縁部に付けられる取っ手と思われる。縄文時代中期中半の土器片ではないかと思われる。

B 石器 (第20図4、第23図、第24図、第25図、第26図) (第2表、第3表)

石鏃 (第23図1-8)

1-3は、SK6や5号溝から旧石器時代の石器と混在している。

1・2はほぼ同型の石鏃で、返しが少ない。2は先端部が欠損している。3は1・2より返しがあり、足の部分がやや円みを持つ。3点とも黒曜石製である。

4はSK4の横のII層から出土している。返しがなく左右非対称な未製品の石鏃である。チャート製。

5と6は2Lグリットの粘土採掘坑覆土から出土した。6は欠損部が多く、形態がはっきりしないが5と同様な形態ではないかと思われる。中央の凹部がはっきりしており、足の長い形態である。2点とも黒曜石製である。

7は表採で、石鏃の未製品のようなものである。チャート製。

8は有基石鏃で、1号溝の側壁から出土している。風化が激しい。菱形のような形態で、返しが少ない。石材は安山岩製。

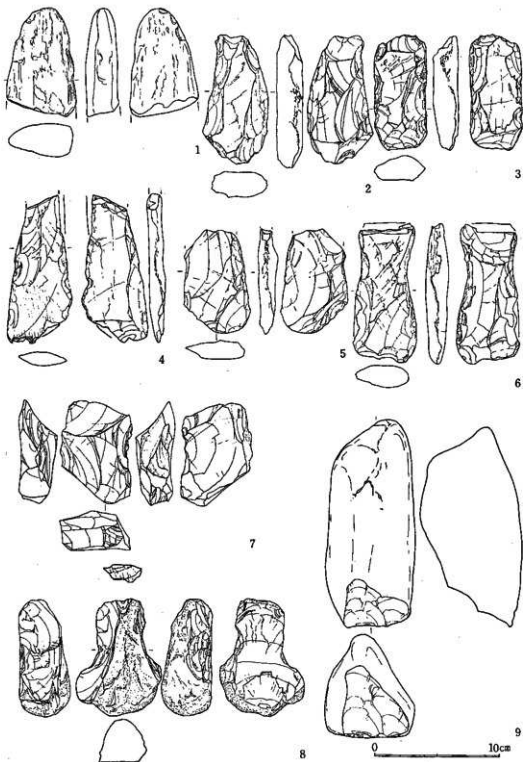
磨製石斧 (第23図9、第24図1)

第23図9は、6Lグリットの粘土採掘坑覆土から出土した磨製石斧で、刃部の破片である。石材は蛇紋岩である。

第24図1は2号溝覆土から出土した。定角型?磨製石斧の頭部で、石材は凝灰岩である。

打製石斧 (第24図2-6)

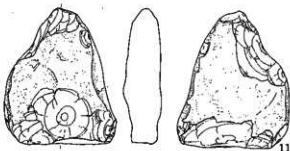
第24図2・3・5・6は粘土採掘坑の覆土から出土している。4は、68Fグリットで単独出土である。



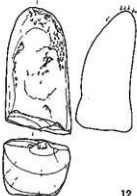
第24图 石器(8) S=1/3



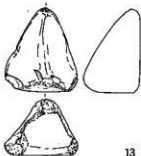
10



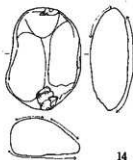
11



12



13



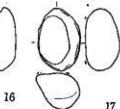
14



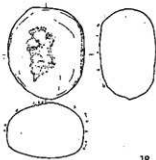
15



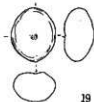
16



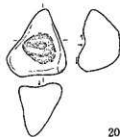
17



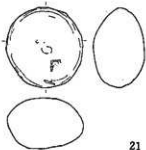
18



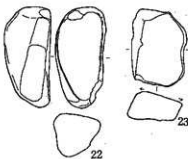
19



20



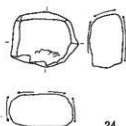
21



22



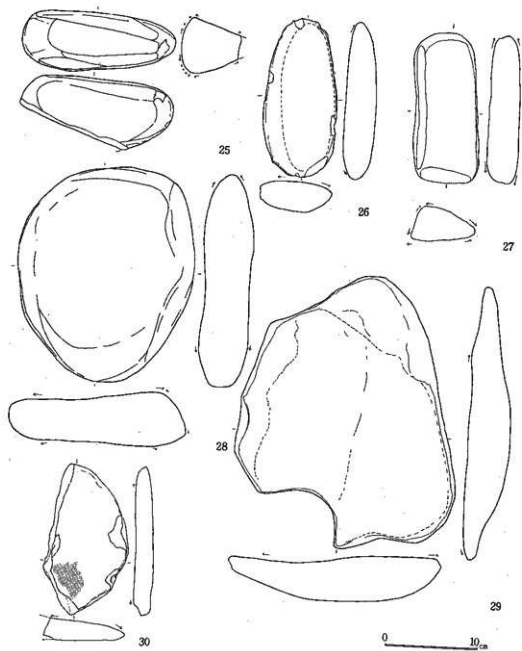
23



24



第25图 石器(9) S = 1/4



第26图 石器00 S=1/4

| 図番 | グリット | No. | 遺構 | 器種 | 石材 | 長 | 巾 | 厚 | 備考 | |
|----|------|-----|----|--------|-----------|------|------|------|---------|----------|
| 17 | 1 | 37I | 16 | SK6石集2 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.3 | 1.0 | 0.4 | 打点部欠損 |
| 17 | 2 | 31I | 3 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.8 | 0.8 | 0.2 | |
| 17 | 3 | 33H | 1 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.7 | 0.9 | 0.2 | |
| 17 | 4 | 32I | 3 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.3 | 0.7 | 0.3 | 下部欠損 |
| 17 | 5 | 31I | 1 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.5 | 0.8 | 0.2 | 下部欠損 |
| 17 | 6 | 32I | 2 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.7 | 0.7 | 0.2 | 下部欠損、接合 |
| 17 | 6 | 32I | 1 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | | | | 下部欠損、接合 |
| 17 | 7 | 32I | 5 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.5 | 0.5 | 0.1 | |
| 17 | 8 | 31H | 7 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.8 | 0.8 | 0.2 | 下部欠損 |
| 17 | 9 | 37I | 22 | SK6石集2 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.5 | 0.7 | 0.2 | 打点部欠損 |
| 17 | 10 | 37I | 18 | SK6石集2 | マイクロブレード | 黒曜石 | 0.9 | 0.6 | 0.1 | 下部欠損 |
| 17 | 11 | 31H | 11 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.4 | 0.7 | 0.15 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 12 | 30H | 2 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.6 | 0.7 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 13 | 31H | 4 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.8 | 0.6 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 14 | 31H | 8 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 2.1 | 0.6 | 0.2 | 打点部欠損 |
| 17 | 15 | 38H | 1 | SK6石集2 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.0 | 0.4 | 0.1 | 打点部欠損 |
| 17 | 16 | 31H | 16 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.5 | 0.6 | 0.15 | 下部欠損 |
| 17 | 17 | 37I | 23 | SK6石集2 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.3 | 0.9 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 18 | 32H | 1 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.0 | 0.6 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 19 | 32I | 11 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.5 | 0.6 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 20 | 31H | 3 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.2 | 0.8 | 0.2 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 21 | 31H | 1 | 石集1 | マイクロブレード | 黒曜石 | 1.3 | 0.6 | 0.1 | 下・打点部欠損 |
| 17 | 22 | 37I | 11 | SK6石集2 | ナイフ形石器 | 頁岩 | 3.5 | 1.9 | 0.8 | 側縁部欠損 |
| 17 | 23 | 46F | | ナイフ形石器 | 黒曜石 | 3.6 | 2.2 | 0.7 | 側縁部一部欠損 | |
| 17 | 24 | 37I | 26 | SK6石集2 | 削器 | 黒曜石 | 2.4 | 1.5 | 0.7 | |
| 17 | 25 | 29H | 9 | 石集1SD2 | ドリル? | チャート | 1.8 | 1.1 | 0.5 | |
| 18 | 1 | 29I | 1 | 石集1SD2 | リタッチフレック | チャート | 1.8 | 1.7 | 0.7 | |
| 18 | 2 | 37H | 1 | SK6石集2 | リタッチフレック | 黒曜石 | 1.9 | 1.4 | 0.4 | 攪乱層 |
| 18 | 3 | 31H | 18 | 石集1 | スクレイパー | 黒曜石 | 2.3 | 2.5 | 0.5 | 基部欠損 |
| 18 | 4 | 31H | 10 | 石集1 | スクレイパー | 黒曜石 | 2.7 | 3.6 | 1.5 | |
| 18 | 5 | 30H | 3 | 石集1SD2 | スクレイパー | 頁岩 | 3.2 | 4.1 | 1.6 | 赤色頁岩 |
| 18 | 6 | 28I | 1 | 石集1SD2 | フレック | 頁岩 | 4.8 | 2.2 | 1.1 | |
| 18 | 7 | 31H | 17 | 石集1 | フレック | 砂岩? | 4.9 | 2.3 | 1.1 | |
| 18 | 8 | 29H | 8 | 石集1SD2 | フレック | 黒曜石 | 5.4 | 2.4 | 1.0 | |
| 18 | 9 | 37G | 2 | SD5石集2 | フレック | チャート | 2.6 | 2.9 | 0.6 | |
| 18 | 10 | 37I | 7 | SD5石集2 | マイクロコアの一部 | 黒曜石 | 2.5 | 1.7 | 1.0 | フレック |
| 18 | 11 | 31H | 14 | 石集1 | フレック | 頁岩 | 2.0 | 2.1 | 1.1 | |
| 19 | 1 | 29H | 1 | 石集1SD2 | スクレイパー | 頁岩 | 8.7 | 4.2 | 2.5 | |
| 19 | 2 | 31H | 12 | 石集1 | 打製石斧 | 安山岩 | 11.1 | 5.6 | 1.8 | 板状素材利用 |
| 19 | 3 | 32H | 9 | 石集1 | 打製石斧 | 安山岩 | | | | 接合、刃部1/2 |
| 20 | 1 | 29H | 8 | 石集1SD2 | コア? | チャート | 2.0 | 3.4 | 1.0 | |
| 20 | 2 | 31H | 13 | 石集1 | コア | 珪質頁岩 | 7.1 | 6.7 | 3.6 | |
| 20 | 3 | 29H | 7 | 石集1SD2 | コア | 珪質頁岩 | 2.4 | 4.9 | 3.7 | |
| 20 | 4 | | | SD2 | 石錘 | 泥岩 | 5.2 | 4.0 | 1.2 | |
| 21 | 1 | 26I | 3 | | 台石 | 安山岩 | 18.1 | 18.9 | 3.9 | 接合、2/3欠損 |
| 21 | 1 | 26I | 2 | | 台石 | 安山岩 | | | | |

第1表 出土石器計測表(単位cm)

| 図 | 番 | グリット | No. | 遺構 | 器種 | 石材 | 長 | 巾 | 厚 | 備考 |
|----|----|------|-----|------|---------|---------|------|------|-----|------------|
| 21 | 2 | 30I | 1 | 石集1 | 磨石 | 安山岩 | 9.8 | 9.3 | 6.6 | 1/6欠損 |
| 22 | 1 | 5-6N | | 粘土採 | スクレイパー | 珪質頁岩 | 2.6 | 2.4 | 1.2 | |
| 22 | 2 | 4M | | 粘土採 | スクレイパー | チャート | 3.6 | 2.8 | 1.2 | |
| 22 | 3 | 43G | 1 | | スクレイパー | チャート | 1.5 | 0.6 | 0.7 | 基部欠損 |
| 22 | 4 | 6N | | 粘土採 | フレーク | 黒曜石 | 4.7 | 2.2 | 0.9 | 黒色土、粘土採下部 |
| 22 | 5 | 2L | | 粘土採 | フレーク | 安山岩? | 4.6 | 2.6 | 0.9 | |
| 22 | 6 | | | SK5 | フレーク | 頁岩 | 3.2 | 3.6 | 0.7 | |
| 22 | 7 | 17I | 1 | SD3 | スクレイパー | 珪質頁岩 | 3.8 | 3.0 | 1.1 | |
| 22 | 8 | 18I | 1 | SD3 | フレーク | 安山岩 | 4.6 | 6.1 | 1.5 | |
| 23 | 1 | 37G | 1 | SD5 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.5 | 1.2 | 0.4 | |
| 23 | 2 | 37I | 24 | SD6 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.2 | 1.2 | 0.4 | 先端部欠損 |
| 23 | 3 | 37G | 3 | SK5 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.5 | 1.4 | 0.3 | |
| 23 | 4 | 26H | 1 | SK4横 | 石鏃 | チャート | 2.0 | 1.3 | 0.4 | |
| 23 | 5 | 2L | | 粘土採 | 石鏃 | 黒曜石 | 2.0 | 14.0 | 0.4 | |
| 23 | 6 | 2L | | 粘土採 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.5 | 1.0 | 0.3 | 2/3欠損 |
| 23 | 7 | 表採 | | | 石鏃 | チャート | 2.2 | 1.9 | 0.4 | |
| 23 | 8 | 49H | 1 | SD1 | 有茎石鏃 | 安山岩 | 2.5 | 1.7 | 0.4 | 風化強くトロボ |
| 23 | 9 | 6L | | 粘土採 | 磨製石斧 | 蛇紋岩 | 5.1 | 5.1 | 1.7 | 基部と裏面欠損 |
| 24 | 1 | 29J | | SD2 | 磨製石斧 | 凝灰岩 | 8.7 | 5.5 | 2.5 | 刃部欠損 |
| 24 | 2 | 6M | | 粘土採 | 打製石斧 | 砂岩 | 10.4 | 5.3 | 2.1 | |
| 24 | 3 | 6QR | | 粘土採 | 打製石斧 | 安山岩 | 9.1 | 4.1 | 2.0 | |
| 24 | 4 | 68F | | | 打製石斧 | ホルンフェルス | 11.8 | 5.2 | 1.3 | 基部欠損、3/4残存 |
| 24 | 5 | 60 | | 粘土採 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 8.3 | 7.4 | 1.6 | 基部欠損、3/4残存 |
| 24 | 6 | 5L | | 粘土採 | 打製石斧 | 安山岩 | 11.3 | 5.1 | 1.8 | 基部一部欠損 |
| 24 | 7 | 80 | | 粘土採 | コア | 安山岩 | 8.6 | 5.7 | 3.0 | |
| 24 | 8 | 29I | 9 | SD2 | 凡字形の石器 | チャート | 9.5 | 6.8 | 4.1 | |
| 24 | 9 | 7P | | 粘土採 | 礫器 | 硬質砂岩 | 16.7 | 7.2 | 8.5 | |
| 25 | 10 | 37I | 20 | SK6 | スタンプ形石器 | 安山岩 | 14.0 | 7.0 | 4.5 | |
| 25 | 11 | 4M | 1 | 粘土採 | 敲打石 | 砂岩 | 14.6 | 11.8 | 4.0 | |
| 25 | 12 | 6P | | 粘土採 | 敲打石 | 砂岩 | 13.4 | 7.0 | 6.0 | |
| 25 | 13 | 5L、K | | | 敲打石 | 砂岩 | 9.0 | 7.6 | 6.0 | |
| 25 | 14 | 7L | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 10.8 | 7.6 | 4.0 | |
| 25 | 15 | 3M | 2 | 粘土採 | 磨石 | 花崗岩 | 5.6 | 3.6 | 1.3 | |
| 25 | 16 | 5L | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 7.0 | 5.9 | 2.7 | |
| 25 | 17 | 6M | | 粘土採 | 磨石 | 砂岩 | 6.7 | 4.1 | 3.8 | |
| 25 | 18 | 37I | 19 | SK6 | 凹・磨石 | 花崗岩 | 9.8 | 8.1 | 6.0 | |
| 25 | 19 | 30I | | | 凹・磨石 | 閃緑岩 | 5.5 | 4.7 | 3.2 | 全面磨き |
| 25 | 20 | 11D | | 粘土採 | 凹石 | 内緑岩 | 7.4 | 6.2 | 5.7 | |
| 25 | 21 | 6P | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 8.6 | 8.2 | 5.4 | 全面磨き |
| 25 | 22 | 6P | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 10.7 | 5.4 | 5.0 | |
| 25 | 23 | 32H | 12 | 石集1 | 磨石 | 花崗岩 | 8.1 | 5.8 | 3.8 | |
| 25 | 24 | 49H | | SD1 | 磨石 | 砂岩 | 5.4 | 6.0 | 3.6 | |
| 26 | 25 | 80P | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 11.6 | 7.7 | 6.3 | |

第2表 出土石器計測表(単位cm)

| 図番 | グリット | No. | 遺構 | 器種 | 石材 | 長 | 巾 | 厚 | 備考 | |
|----|------|-----|----|--------|------|-----|------|------|-----|------|
| 26 | 26 | 7N | | 粘土採 | 磨石 | 安山岩 | 12.1 | 7.9 | 3.3 | 多孔質 |
| 26 | 27 | 29J | 21 | SD2石集1 | 磨石 | 安山岩 | 16.1 | 7.1 | 3.4 | |
| 26 | 28 | | | 粘土採 | 石皿内面 | 安山岩 | 23.3 | 19.5 | 5.9 | 磨面内面 |
| 26 | 29 | 5L | | 粘土採 | 石皿 | 安山岩 | 29.9 | 24.3 | 4.9 | |
| 26 | 30 | 5LK | | 粘土採 | 石皿 | 安山岩 | 16.4 | 9.0 | 2.2 | |

第3表 出土石器計測表(単位cm)

2は撥形で石材は砂岩製。3は短冊形で、安山岩製。4は、頭部と刃部の一部欠損した撥形の打製石斧で、安山岩製。5は刃部と頭部欠損の打製石斧で、安山岩製。6は頭部が一部欠損した、胴部左右くびれを僅かに持つ安山岩製の打製石斧である。

コア(第24図7)

7は横広いの剥片をとるためのコアと思われる。粘土採掘坑の覆土から出土しており、安山岩製。規則的な剥離からすると旧石器時代のコアの可能性もある。

凡字形の石器(第24図8)

2号溝から出土した石器で、旧石器時代の石器と混在していた。

卵形の転石の尖った部分を剥離して取り去り、それを長軸方向に半載したチャート製の素材を用いている。その長軸の側縁部に左右とも抉りを付けている。その抉りは主要剥離面との成す角度は直角に近いもので、どの面を石器の刃部としたか明確でない。コアの可能性も考えられる。しかし、側縁部の剥離は抉りの為と思われる。

同類の石器の発見を待ちたい。

磔器(第24図9)

棒状の長軸の一端を剥離しただけの石器である。粘土採掘坑の覆土から出土した。石材は安山岩製。

スタンプ形石器(第25図10)

三角錐形の磔器である。棒状の転石を半載している。半断面の縁辺部に小剥離痕が巡っている。安山岩製である。

敲打石(第25図11-13)

11-13は粘土採掘坑の覆土から出土した。

11は平たい転石の周縁を敲打石としている。砂岩製である。

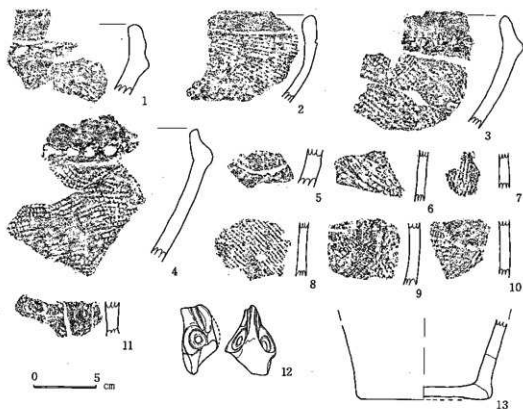
12は棒状の石器の頭部を打面としている。基部は欠損している。砂岩製である。

13は三角錐状の転石を用いている。先端面に敲打痕と、縁辺に磨痕が残っている。砂岩製。

磨石・凹石(第25図14-27)

第25図14-17、20-22、25・26は粘土採掘坑から出土している。

14・16・17は楕円形の転石の平坦な面を磨面としている。15は小さいめの扁平な転石で、やはり全面を磨石として用いている。14、16が安山岩製。15は花崗岩製。17は砂岩製である。



第27図 縄文土器拓影

21は球形の転石面を全面磨石としている。安山岩製。

22は転石の平坦面と側面を磨石としており、23・24は磨面がすり減り、石鱗形に変形したものである。22は安山岩製。23・24は、1/2欠損。23は花崗岩製。

24は1号溝の攪乱層内より出土し、石材は砂岩製である。

25・27は平坦面と側辺を磨石にしたもの、26は平坦面のみを磨石にしたものである。25-27は石材が安山岩を用いている。27は2号溝内出土である。

第25図18-20は凹石としても利用している。18はSK 6の覆土内、19は30IグリットのII層内から出土した。

18は中央部僅かに凹みがあり、平坦面と側面は磨石となっている。石材は花崗岩である。

19は球形の転石の中央部に凹みがある。石材は閃緑岩で、全面磨面としてもちいている。

20は三角錐の底面部に大きく褶り鉢状になった凹みがある。石材は閃緑岩である。

石皿（第26図28-30）

石皿はすべて粘土採掘坑から出土している。

28は両面を石皿面としている。両面とも凹面部がある。安山岩製。

29は、裏面が凸面ようになっており不安定な石皿であるが、表面はやや凹面になっている。
30は平坦な石皿で、一部に炭化物が付着している。石皿はすべて安山岩である。

石錘 (第20図4)

2号溝の覆土中に出土した。偏平な楕円の転石の両側縁に抉りを入れ、表裏を磨いた石錘である。石材は泥岩である。

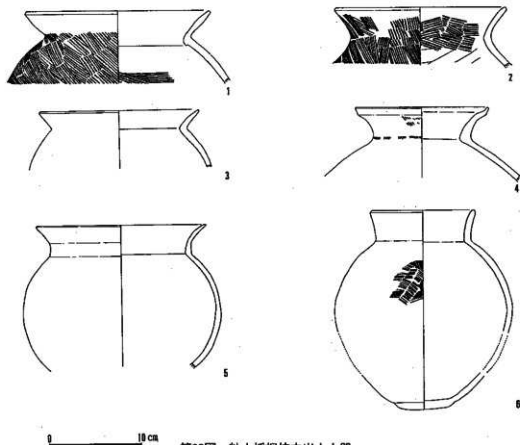
SK 6や5号溝から出土した石器類は、スタンプ形石器や石鏃などの特徴を見ると縄文時代の早い時期のぐらゐの石器ではないかと思われる。有茎石鏃は縄文時代晩期から弥生時代のものと思われる。

縄文土器をはじめ、打製石斧、磨石、敲打器、石皿などの石器が粘土採掘坑に多くみられるのは、そこに、住居址なり集落なりに関係する遺構があったためと思われる。

3) 古墳時代の遺物

A 土器 (第28図)

古墳時代の土器は、粘土採掘坑のみから出土した。粘土採掘坑では、覆土と底面から土器を



第28図 粘土採掘坑内出土土器

検出した。しかし、粘土層のこともあり、出土した土器は脆く、取り上げ中に破損したり、水洗中に溶けてしまったりし、器形の明確にわかるものは6点にしかならなかった。粘土層は水はけが悪く、覆土中の土器は長時間水付き状態にあり、土器が溶けたものと思われる。

第28図1は甕形土師器である。70グリットから出土した。胴部下から欠損している。口縁部は外反し、頸部はくの字状に屈曲している。内面の頸部はやや段がみられる。表面は頸部下より斜めの刷毛目で整形されている。内面は胴部上部に横位の刷毛目がみられる。

2は4NMグリットの覆土から出土した。胴部下から欠損した甕形土師器である。頸部はやや屈曲している。口縁下部より、斜め縦方向に刷毛目があり、内面も篋削りの後、横方向に刷毛目で整形されている。

3は3-4Mグリットの覆土から出土した甕形土師器である。胴部下から欠損している。頸部はくの字状に屈曲している。整形痕は表面が溶けており、判らなかつた。

4は90グリットの覆土から出土した壺形土師器である。口縁部に段を設けており、頸部もくの字状に屈曲し胴部から広がる様相を呈している。内面の口縁も受け口状になっている。整形痕はほとんど表面の残存状況が悪いため判らないが、口縁下と頸部に刷毛目の痕跡がみられる。

5は5Kグリットから出土した甕形土師器である。底部が欠損している。頸部に、2段のくびれを持つ、断面がコの字状になり、胴部が球形を呈する土師器である。整形痕ははっきりと残っていなかつた。

6は70グリットから出土した壺形土師器である。口縁部から頸部までは垂直に近く、頸部から胴部にかけて球形となる。底部は段の付いたやや丸底に近い器形である。胴部に短い刷毛目の整形痕が判る程度で、ほとんどの整形痕は剥がれて判らない。

これらの土器は、全体的な様相から、古墳時代の古い段階の土器と思われるが、器形の判明した土器が少なく、遺構が特殊で、壺と甕形の土器しか出土していないため、はっきりとした時期判定が難しい状態である。ただ第28図5は古墳時代の古い段階の北陸形の土器と思われる。

4) 奈良時代の遺物

A 土器 (第29図—第31図)・土製品 (第32図2・4)

1号住居址 (第29図1-4、第32図4、第5表)

1号住居址では、土師器の甕破片、須恵器の甕破片、須恵器の杯・高台付杯・摘付蓋等が出土している。器形の判るものは4点であった。酸化炎で焼かれた杯も見られた。土製の支柱も見られた。

第29図1・4は須恵器の杯である。1は口縁部と底部の一部が欠損している。底部は回転篋削りである。4は底部のみ残存している杯で、底部は篋削りである。篋削りは体部下5mmまで及んでいる。

第29図3は、酸化炎で焼かれた須恵器の高台付杯である。底部は篋削りで体部下5mmまで及んでおり、高台も回転篋削りで、整形している。高台はやや外反している。

第29図2は摘み部分が欠損している須恵器の蓋である。蓋の表面は摘み部分から1/2まで回転篋削りで整形している。

土製品として、甗で使われた土製の支柱(第32図4)が出土した。棒状の支柱で、約1/2欠損している。表面は焼けただれていてボロボロになっている。

2号住居址(第29図5-22、第31図1・2、第32図2、第5表)

2号住居址からは須恵器の杯・高台付き杯・碗・蓋・壺、土師器甕と思われる破片が出土している。酸化炎で焼かれた須恵器が多くみられた。1点土製の鈴も出土した。

第29図1、21は、碗と思われる。1は酸化炎で焼かれた須恵器の碗で、砂粒子が多く含まれており、非常に脆く風化している。整形痕はわかりにくい、底部は篋削りと思われる。体部上半部は下半部に比べやや厚くなっている。21は碗と思われる底部が欠損している須恵器の破片である。焼成は良好で、成形も整っている。体部が口縁に向かってやや開く、高さのある碗と思われるものである。金属器を模倣した器形であろうと思われる。

第29図2-13は、須恵器の杯である。2と9と10は底部が欠損している。2と13の杯以外は口縁部が外反する。7はやや生焼けの酸化炎焼成の杯である。底部が篋切りか篋削りかはっきりしないが、体部下半まで回転篋削りが認められる。8は底部に篋起こしの痕跡をとどめる酸化炎焼成の杯である。底部は回転篋削りが認められる。体部下半部にややくびれが見られる。9は底部が変形している。表面に気泡が見られる。底部に回転篋削りが認められる。10は底部に回転篋削りが認められる。11は底部がやや厚みがあり、篋削りが認められる。12は底部に篋起こしの痕跡が認められ、体部下半部1/2まで回転篋削りが認められる。13は底部を回転篋削り痕が認められる。体部下半部にくびれがみられる。

第29図14・15は酸化炎焼成須恵器の高台付盤である。やや生焼けであり、脆く、15など調整が不明である。14は底部から体部下半1/2まで回転篋削りが認められる。高台も回転篋削りされている。

第29図16は酸化炎焼成須恵器の高台付杯であろうと思われる。16も生焼けである。底部のみ残存している。14・15より底形が8mm程小さいようである。14と同様底部は回転篋削りである。

第29図17-20は、須恵器の摘付蓋である。17は摘みの頂部の凸部に回転篋削りが認められ、表面の摘み部より下部3/2まで回転篋削りが認められる。焼成は良好であり、器形はやや扁平である。

18はやや歪みがあり、やや酸化炎焼成と思われる須恵器の摘付蓋である。摘み部分の頂部は平であり、ナデで調整してある。その下部は2/3まで回転篋削りがみられる。内面に線刻記号

が描かれている(第31図1)。「井」の字の一部でないかと思われる。19はやや焼け歪があり、口縁端部が外反している。摘みの下部から2/3まで回転篋削りで調整している。20は酸化炎焼成である。宝珠形の摘みが見られる。摘み下部より1/2回転篋削りがみられる。

第31図2は須恵器底部の破片である。「×」の線刻記号である。「井」の字の一部であろうか。

第29図22は須恵器の壺である。垂直に立つ短頸の壺で胴部から下は欠損している。頸部下は平行叩き目文がみられ、自然釉がかかっている。

第32図2は土鈴である。接合面で2つに割れた半球が出土した。凡字形の摘みには中央に穴があげられていた。

3号住居址(第29図23-28、第30図1-13、第31図3・4、第5-6表)

3号住居址には須恵器の杯、高台付き杯、摘付蓋、壺、甕、土師器の甕等がみられた。

第29図23-28、第30図1・3は須恵器の杯である。26以外の杯は酸化炎焼成である。23は底部から体部下部まで回転篋削りがみられる。24-26は底部が回転篋削りである。27は底部に篋起こしが見られ、底部より体部下部まで回転篋削りが認められた。28の底部は篋起こし認められ、回転篋削りである。第30図1は底部が回転篋削りである。第30図3は二重に重なっている状態で出土した。

第30図2は高台付杯である。底部が、高台下まで垂れ下がっている。

第30図4・5は摘付蓋である。4は摘み下2/3まで回転篋削りがされている。5は焼け歪が激しい状態である。

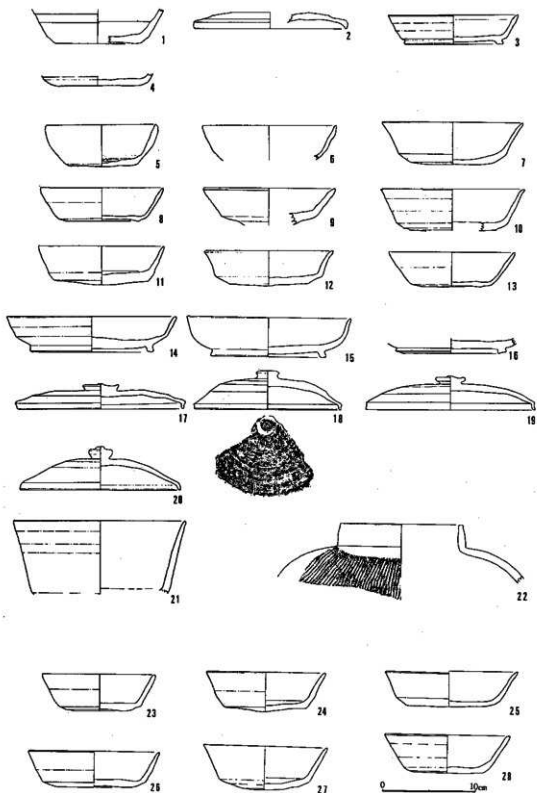
第30図6は須恵器の短頸の壺である。口縁から頸部まで垂直である。頸部下に平行叩き目文が認められる。胴部下半部から下は欠損している。

第30図8は須恵器の甕である。口縁部には段が認められ、頸部から口縁にかけて外反している。胴部から下部は欠損している。

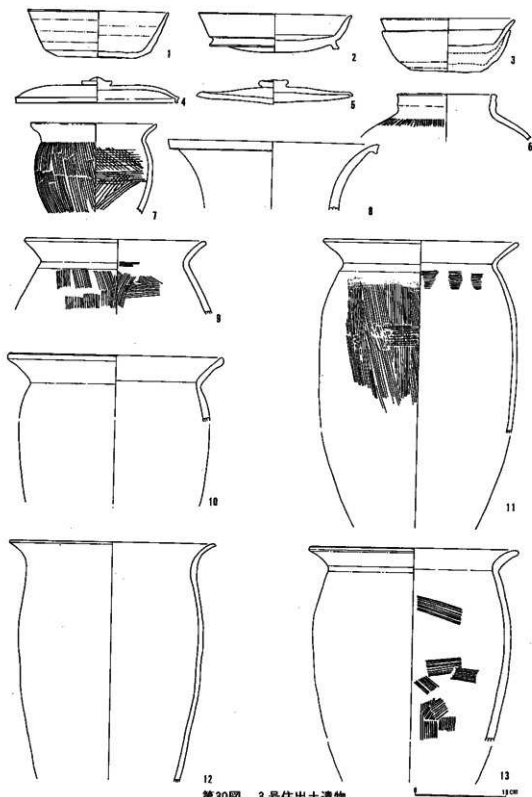
3号住居址の土師器の甕は、胴部が長く頸部がくの字形に屈曲して口縁部が外反している。胴部の張りは少ないという特徴がある。

第30図7・9-13は土師器の甕である。7は他の土師器より小型である。胴部表面は縦方向に刷毛目が見られる。内面の胴部には斜め方向に刷毛目で施した後横方向に刷毛目で調整している。胴下部は欠損している。9は胴下半部から欠損している。胴部上部に表面は縦方向に刷毛目があり、内面は頸部には横方向、頸部下は斜めと横方向に刷毛目が認められる。11は胴部表面は縦の刷毛目があり、内部頸部下には横の刷毛目が認められる。13は胴部内面に刷毛目が認められる。表面は風化が激しく整形痕不明。10・11も風化が激しく整形痕不明。10は胴部下半部欠損。11・12・13は胴部下部欠損。

線刻記号のある土器片が3号住居址には2点認められた。第31図3は須恵器蓋の破片で「×」



第29图 1号住 2号住 3号住出土遗物



第30图 3号住出土遺物

| 図版番号 | グリット | 遺構 | No. | 器種 | 焼成 | 口径 | 高さ | 底径 | 備考 |
|-------|------|-----|-----|--------|-----|------|------|------|-----------|
| 28-1 | 7N | 粘土採 | 1 | 土師甕 | | 19.0 | 7.4 | | |
| 28-2 | 4N、M | 粘土採 | | 土師甕 | | 17.5 | 5.9 | | |
| 28-3 | 3-4M | 粘土採 | | 土師甕 | | 16.6 | 6.0 | | |
| 28-4 | 9O | 粘土採 | | 土師甕 | | 13.8 | 8.0 | | |
| 28-5 | 5K | 粘土採 | | 土師甕 | | 17.5 | 15.0 | | |
| 28-6 | 7O | 粘土採 | | 土師甕 | | 10.7 | 20.7 | 5.0 | 底部丸底、表面風化 |
| 29-1 | 62F | 1住 | | 須恵杯 | 良 | | | 7.7 | |
| 29-2 | 60H | 1住 | | 須恵摘み付蓋 | 良 | 15.7 | 1.3 | | 接合 |
| 29-2 | 59I | 1住 | 14 | 須恵摘み付蓋 | 良 | | | | 接合 |
| 29-3 | 60H | 1住 | 4 | 須恵高台付杯 | | 13.4 | 3.1 | 10.0 | 重って焼成 |
| 29-4 | 60H | 1住 | 2 | 須恵杯 | 良 | | | 8.0 | |
| 29-5 | | 2住 | 41 | 須恵碗 | 酸化炎 | 11.4 | 4.3 | 7.4 | |
| 29-6 | | 2住 | 31 | 須恵杯 | 酸化炎 | 13.7 | 3.8 | | 接合、底部欠 |
| 29-6 | | 2住 | 139 | 須恵杯 | 酸化炎 | | | | 接合、底部欠 |
| 29-7 | | 2住 | 21 | 須恵杯 | 酸化炎 | 14.7 | 4.4 | 8.1 | |
| 29-8 | | 2住 | 30 | 須恵杯 | 酸化炎 | 13.0 | 3.6 | 6.0 | 接合 |
| 29-8 | | 2住 | 30 | 須恵杯 | 酸化炎 | | | | 接合 |
| 29-9 | | 2住 | 40 | 須恵杯 | | 13.5 | 3.8 | | 底部欠、変形、接合 |
| 29-9 | | 2住 | 52 | 須恵杯 | | | | | 底部欠、変形、接合 |
| 29-10 | | 2住 | 29 | 須恵杯 | | 14.8 | 4.3 | 8.8 | 接合、底部一部欠 |
| 29-10 | | 2住 | 107 | 須恵杯 | | | | | 接合、底部一部欠 |
| 29-10 | | 2住 | 75 | 須恵杯 | | | | | 接合、底部一部欠 |
| 29-11 | | 2住 | 47 | 須恵杯 | | 13.0 | 4.0 | 9.7 | |
| 29-12 | | 2住 | 118 | 須恵杯 | | 13.3 | 3.6 | 7.8 | |
| 29-13 | | 2住 | 20 | 須恵杯 | | 12.9 | 3.9 | 7.5 | |
| 29-14 | | 2住 | 24 | 須恵盤 | 酸化炎 | 17.7 | 3.8 | 12.2 | |
| 29-15 | | 2住 | 65 | 須恵摘み付杯 | 酸化炎 | 17.2 | 4.1 | 12.0 | |
| 29-16 | | 2住 | 34 | 須恵摘み付杯 | 酸化炎 | | 1.5 | 11.4 | 底部のみ残 |
| 29-17 | | 2住 | 64 | 須恵摘み付蓋 | | 17.0 | 4.4 | | |
| 29-18 | | 2住 | 72 | 須恵摘み付蓋 | 酸化炎 | 15.2 | 4.0 | | |
| 29-19 | | 2住 | 62 | 須恵摘み付蓋 | | 17.7 | 3.5 | | |
| 29-20 | | 2住 | 66 | 須恵摘み付蓋 | 酸化炎 | 17.5 | 0.7 | | |
| 29-21 | | 2住 | | 須恵碗 | | 18.0 | 7.5 | | |
| 29-22 | | 2住 | 112 | 須恵壺 | | 12.7 | 5.5 | | 自然釉 |
| 29-23 | | 3住 | 15 | 須恵杯 | 酸化炎 | 11.8 | 3.8 | 5.4 | |
| 29-24 | | 3住 | 16 | 須恵杯 | 酸化炎 | 12.4 | 4.0 | 8.5 | |
| 29-25 | 65G | 3住 | 7 | 須恵杯 | 酸化炎 | 13.7 | 3.6 | 9.2 | |
| 29-26 | 64F | 3住 | | 須恵杯 | | 13.7 | 3.7 | 7.8 | |
| 29-27 | 63F | 3住 | | 須恵杯 | 酸化炎 | 12.7 | 4.6 | 4.1 | 歪みあり |
| 29-28 | | 3住 | 17 | 須恵杯 | 酸化炎 | 12.8 | 4.4 | 7.2 | |
| 30-1 | | 3住 | 22 | 須恵杯 | 酸化炎 | 14.7 | 4.8 | 8.4 | |
| 30-2 | 65F | 3住 | | 須恵杯 | 酸化炎 | 15.9 | 4.0 | 13.5 | |

第4表 出土石器計測表(1) (単位cm)

| 図版番号 | グリット | 遺構 | No. | 器種 | 焼成 | 口径 | 高さ | 底径 | 備考 |
|-------|------|----|-----|--------|----|------|------|-----|--------|
| 30-3 | | 3住 | 13 | 須恵碗 | | 13.2 | 4.3 | 7.2 | |
| 30-4 | 65F | 3住 | | 須恵摘み付蓋 | | 16.9 | 2.6 | | |
| 30-5 | | 3住 | 13 | 須恵摘み付蓋 | | 16.0 | 2.5 | | 焼け歪み有る |
| 30-6 | | 3住 | | 須恵壺 | | 9.5 | 5.4 | | |
| 30-7 | | 3住 | | 土師甕 | | 13.0 | 9.0 | | 黒褐色土上面 |
| 30-8 | 65F | 3住 | | 須恵壺 | | 11.8 | 3.8 | 5.4 | |
| 30-9 | 63F | 3住 | | 土師甕 | | 18.6 | 7.5 | | 接合 |
| 30-9 | 65F | 3住 | | 土師甕 | | | | | 接合 |
| 30-10 | | 3住 | 20 | 土師甕 | | 22.3 | 6.5 | | |
| 30-11 | | 3住 | 12 | 土師甕 | | 19.9 | 20.0 | | |
| 30-12 | | 3住 | 9 | 土師甕 | | 21.3 | 24.8 | | 接合 |
| 30-12 | | 3住 | 63 | 土師甕 | | | | | 接合 |
| 30-13 | | 3住 | 12 | 土師甕 | | 21.4 | 20.0 | | |

第5表 出土石器計測表(2)(単位cm)

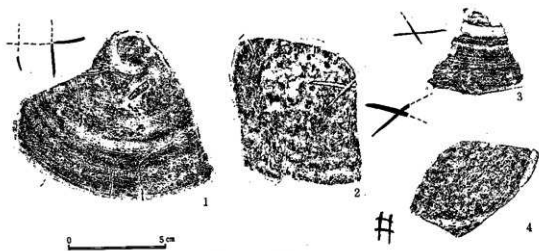
形であるが、「井」の字の一部である可能性がある。第31図4は杯の底部に認められる。「井」の字である。高井の「井」の略号であろうか？

調査区で発見された3つの住居址は、すべてほぼ同時期の住居址と思われる。遺物の観察から、須恵器の杯は底部から体部下面まで回転削りがあり、土師器の甕の胴部の表裏に刷毛目で調整され、胴部が長いこと、須恵器の蓋の摘み下に回転削りがみられることなど、奈良時代初期の特徴がみられる。当地域で、この時期の発見例があまり少ないため、貴重な資料と思われる。

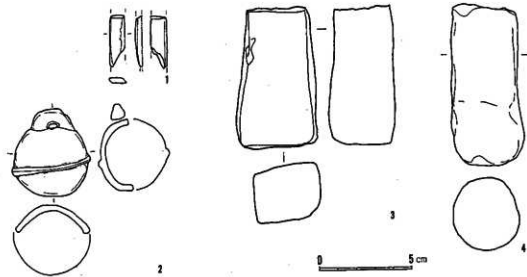
5) 時期不詳の遺物

A 石製品(第32図1・3)

第32図1・3は粘土採掘坑の覆土上面から出土したものである。1は110グリットから出土した、磨製の石製品である。先端と基部が欠損した長さ2.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmと薄い刃物状の石製品である。石材は粘板岩と思われる。3は11kグリットから出土した砥石である。長さ7.4cm、幅4.2cm、厚さ3.5cmの折れた方形の砥石である。砥石面は凹んでいる。



第31圖 線刻記号拓影



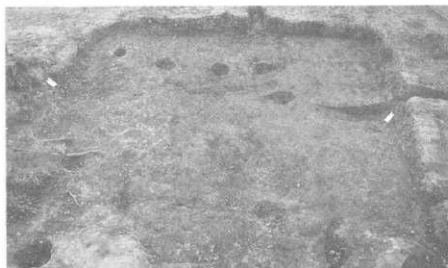
第32圖 石製品・土製品

III ま と め

- 1 旧石器時代は2つの石器集中部が検出され第1集中部からは中野市では初めてのマイクロブレード期の石器群の解明ができた。当遺跡の西側の長野県埋蔵文化財センターの調査した石器集中部とあわせ、マイクロブレード期の様相が明確になるものと期待される。
- 2 縄文時代は古墳時代の粘土採掘坑によって破壊されていたが、中期の住居址が調査区の北側に存在していたものと推定された。
- 3 調査区北側にあった粘土採掘坑は、古墳時代はじめ頃行われた粘土採掘抗群であった。大量の粘土が採掘されたとみられる。覆土の土器の中に、北陸系の土器器の甕がみられた。この粘土の流通が、今後胎土分析から、研究されることに期待したい。
- 4 調査区の南側には、3軒の奈良時代初期の住居址が発見された。住居址の覆土や床面から酸化炭の須恵器や焼け釜のある遺物が多く検出された。2号住居址からは灰青色粘土がこぼれた状態で、床面から検出された。調査区の近辺には窯跡が多くみられることから、今後、この住居址での遺物の検出状況等考察されるであろう。
2・3号住居址から出土した須恵器の中に、線刻記号の入ったものがあり、「井」の文字が記載されたものがあった。これは窯名かあるいは地域名の高井の略かと思われる。今年度発掘した長野県埋蔵文化財センターの清水山古窯址にも高井の文字が刻まれた資料や「井」の字や「×」の線刻の須恵器が出土している。これら住居址の資料が、清水山古窯址と何らかの関係があると思われる、今後の詳細な発表を待ちたい。
- 5 調査区の南西側の崖に2基の窯跡が発見されたが崖のため竈が流出してしまっ時期形状がはっきりとしなかった。
- 6 各種の溝が検出された。これらの溝の出現期は明確にできなかったが、埋没期は近世以降と思われる。
- 7 時期や性格の不明な土壌が発見された。土壌の下部には粘土層が存在し、粘土の採取のためにあけられた土壌もあったと思われる。

以上のように、今回の調査では多くの発見があった。これらの発見は、今後周辺地域との関係を知る上で貴重なものと思われる。調査から、報告書作成まで多くの時間が費やせなかったため、資料の詳細な分析や周辺地域との比較など多くの課題を残した。今後この調査結果を踏まえ、研究を重ねたいと思っている。

この調査にあたり、長野県埋蔵文化財センターをはじめ各方面の方々から御協力、御助言、御教示、御指導をいただいた。心より感謝いたします。



第1圖版 上-1住 中-2住出土狀況 下-2住



第2図版 上-3住 下-カマ断面



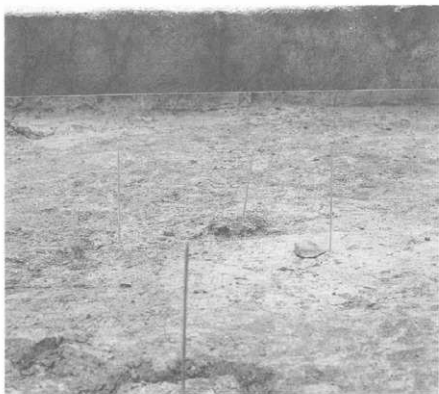
第3図版 上-カマ内出土状況 下-SK3 SK4



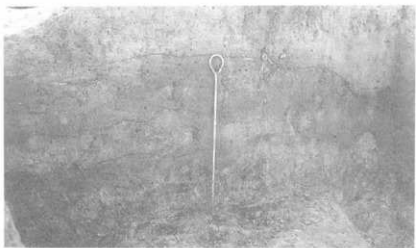
第4圖版 上-SK 6 下-SK 2



第5図版 上-第1石器集中部 下-第2石器集中部



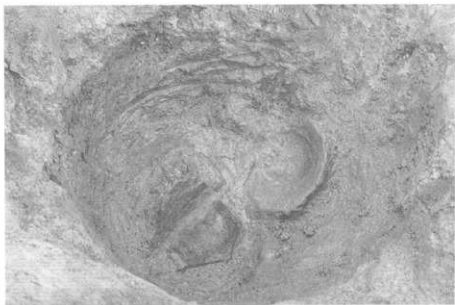
第6図版 第1石器集中部 上-スクレイパー、マイクロブレード 下-コア、スクレイパー



第7图版 粘土採掘坑断面



第8図版 粘土採掘坑出土土器 上-5K 下-7N



第9图版 粘土採掘坑出土土器 上-5N 下-左7M 下-右3L



第10図版 粘土採掘坑 上-南側より 下-北側より

沢田鍋土遺跡
第II地点
発掘調査報告書

平成5年3月20日印刷

平成5年3月26日発行

発行 中野市教育委員会

長野県中野市三好町1-3-19

印刷 カナイ美術印刷

